

19世紀末イングランド・ウェールズにおける アイルランド人移民家族の研究

清水 由 文*

1. は じ め に

先稿においてイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民の家族に関する特徴のアウトラインを紹介したが〔清水, 2005, 8-19〕, ここではアイルランド人移民の移民元の特徴とイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民の特徴を関連させて論じたと思う。まず筆者はそれを分析するために伝統的なプッシュ・プル要因のスタンスに立脚していることを明らかにしておきたい。

ところでこれまでしばしばアイルランド人の移民研究で1845年の大飢饉以降急激にアイルランド人移民が増加したと解釈されてきたのであるが, 最近では大飢饉以前よりアイルランド人移民は常態化していたというのが定説になっている。Louis Cullen は大飢饉が発生しなかったとしても移住の増加や人口減少は避けられなかったという〔L.M., Cullen, 1987, 134-5〕。すなわち飢饉以前の急激な人口増加はジャガイモの食生活のみにより依存していたのであり, すでに小保有農という土地保有に対する不確かな状況や家内工業の衰退によって家族維持が困難であり, 移民や出稼ぎ労働が家族戦略にとって最大の方法であったとみなされていたのである。そしてそれは1825~30年でアイルランドの32州から11万人, 1831~40年で39.5万人が移出していることから確認することができる〔富岡, 1988, 59〕。そして本稿の対象時期である1881年にはアイルランド人はすでにイングランド・ウェールズに56.2万人, スコットランドに21.9万人, アメリカに185.5万人, カナダに18.6万人, オーストリアに21.3万人, その総計303.4万人がすでに移住先で生活していたのである〔*Commission on Emigration and other Population Problems, 1949-1954 Reports*, 1954, 126〕。

本稿は大飢饉から一世代後の1881年におけるイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民を対象にしながら, アイルランド人移民の家族構造とネイティブな家族との比較に焦点がおかれている。そして大飢饉の時期に移住したアイルランド人移民の家族構造がいまだ明確にそこに反映されているものとみられるのである。

筆者は1881年におけるイングランド・ウェールズの人口センサス原簿のデータをとおしてアイルランド人移民の家族構造を数量的に明らかにすることにより, 1881年のイングランド

*本学社会学部

キーワード：人口センサス, アイルランド人移民, ミネソタ人口センター, NAPP, 比較家族史

・ウェールズにおけるアイルランド人移民の家族がどのように受入れ国に融合していったのか、また受入れ国の家族とどのような違いがそこに認められるのであろうかという問題を本稿の追究目標としているのである。

2. アイルランド人移民研究と移民家族研究のアプローチ

アイルランド人の移民研究にはこれまで膨大な研究が蓄積されており、ここではそれを検討することは筆者には不可能であるし、その余裕もない。したがってここでは代表的なアイルランド人移民の研究を取り上げることによりその責務を果たしたい。

最初にアイルランド人移民の送元に関する研究を見ておこう。まず W.J. Smith による「Irish Emigration, 1700-1920」という論文ではアイルランドからの移民数、アイルランド移民のプッシュ要因とプル要因、移民と移民先の宗教の関連性、女性の移民、輸送手段、受け入れと居住、統合と隔離、移民と資本移動、移民と政治運動が項目として取り上げられており、そこではこれまでのアイルランド人移民の研究項目が整理されているのである〔William, J. Smyth, 1992, 49-78〕。また D. Fitzpatrick による『*Irish Emigration 1801-1921*』は小冊子であるが、アイルランドから移住したプロフィール（1825-1915年の移民数、1851-1911年の移民先、男女別移民数、年齢コーホートなどの項目）と移民の促進と妨害する要因からアイルランド移民を論じている。そして飢饉後における移民は生活サイクルにおける期待されたステージであったというスタンスが興味深い点である。とくに彼によると子供が潜在的な移民とみなされ、土地の不分割相続と直系家族の形成が移民を促進したという視点は大いに注目されてよい〔D. Fitzpatrick, 1984, 29-30〕。それ以外に D. Fitzpatrick による『*A New History of Ireland, v, Ireland Under The Union, 1 · 1801-70*』に含まれた「Emigration, 1801-70」の論文もある。

T. Hatton and J.F. Williamson による「After the Famine: Emigration from Ireland, 1850-1913」の論文では大飢饉以降におけるアイルランド人の移民が研究対象にされており、アイルランド人の移民が貧困、低賃金、大家族、小保有農として生存機会の少なさの変数から高い移民率の原因を追究した研究といえる。そしてこの研究はアイルランド人移民の属性である年齢、性、出生地を1881年、1891年、1901年、1911年の4回のセンサス報告書をデータとして人口学的に明確化させようとしているところに特徴があるといえる〔T.J. Hatton and J. F. Williamson, 1993, 575〕。

Frank Bovenkerkによる「On the Causes of Irish Emigration」では1940年以降のセンサス結果に基づく研究によるものであるが、19世紀における移民の概念がある程度この時期の状況に類似したものと指摘されている。すなわち、高い人口密度、家族構造の変質、女性の結婚に対するよくない見通しをあげており、移民の原因として Arensberg と Kimball により指摘されたように農민家族が家族保有に顕在化する緊密な結合をもち、1860年以降土地保有が Land Purchase Acts で不分割相続になり、1人の息子が相続し縁組婚の制度と関係付けてい

る点、つまり家族システムと相続システムとを関連づけて移民を検討している視点は注目されるであろう〔Frank Bovenkerk, 1973, 265-6〕。

以上のような研究以外に S.H. Cousens による「Emigration and Demographic Change」と「The Regional Variations in Population Changes in Ireland」の論文、J.H. Johnson による「The Context of Migration: the Example of Ireland in the Nineteenth Century」があげられよう。

このように移民送出元であるアイルランドの研究として人口学的研究が比較的多いものの、Fitzpatrick や Bovenkerk のような家族システムと相続システムと関連付けて移民を解釈する社会学的視角は注目されるべき研究であるといえよう。

他方移民受け入れ国であるイギリスにおける移民のパイオニア的研究として A. Redford による『*Labour Migration in England, 1800-1850*』をあげることができる。この初版は1926年であるが、再版である1964年版を編集した W.H. Chaloner がその前書きで、この研究に対してつぎの2つの貢献をあげている。すなわち第1に産業革命期の人口移動を研究したこと、それはつまり雇用機会増大による農村から都市への人口移動を明らかにしたことを意味している。第2にこれまでは産業革命期における国内移動のような短期間移動に関する研究が行われていたが、国際間移動が取り扱われていなかったのであり、それをセンサス原簿やイギリス議会資料を用いて数量的に検討したことに彼の研究の貢献をあげている〔A. Redford, 1968, vii〕。そしてそこでは移民の重要性、死亡率の低下、出生率の変化が重要な変数として取り上げられ、それ以降の移民研究に多大な貢献をしたことが認められる。そして筆者は彼が1841年と1851年のセンサス原簿をデータとしてアイルランド人移民の研究をしたことにとくにその先駆的意義を認めたいのである。すなわちイギリスでセンサス原簿をデータとした研究が本格化するのは1971年の Michael Anderson による『*Family Structure in Nineteenth Century Lancashire*』や1973年の Allan Armstrong による『*Stability and Change in an English County Town*』の研究以降であるからである。

A. Jacksonによる『*The Irish in Britain*』では、イギリスへのアイルランド人移民が特定の新しい環境に適應していく普通の家族の経験を捉える視点がそこに認められ、それはアイルランド人移民における居住の背景の歴史を現代まで把握しようとした研究である。そこではアイルランドからグレートブリテンへの出国に関して1841年から1951年の110年間の移民数の人口学的側面が検討され、また移民へのアイルランドの経済的・社会的背景と移民の原因が取り上げられている。さらにイギリスでのペスト、疾病、貧困という居住の社会的背景において移民がおかれた状況やアイルランド人移民で就業者の多いテラーの事例的研究も行われている点は注目されてよい。

1970年代には後述するように Lynn H. Lees による『*Exiles of Erin*』〔1979〕があげられる。1980年代には W.J. Lowe による『*The Irish in Mid-Victorian Lancashire*』は彼がトリニティ・カレッジに提出した膨大な博士論文『*The Irish in Lancashire, 1846-71: A Social History*』

〔W.J. Lowe, 1974, 628ページ〕を基礎にした研究である。それはとくに1840年半ばから1870年までのビクトリア中期におけるランカシャーにおけるアイルランド人移民の動きに注目した研究である。ランカシャーは当時都市化と産業化が急激に起こった都市であり、そこへ流入した大飢饉以降のアイルランド人移民のコミュニティの歴史が検討されているが、具体的な地域として Liverpool, Manchester, Oldham, Preston, St Helens, Salford, Widnes の7つの工業都市が研究対象として取り上げられている。そしてそれらのサンプル都市におけるアイルランド人移民の割合、1851～1871年における世帯平均規模の違いに関してアイルランド人移民（1851年ではランカシャーの5.8人）がイングランド・ウェールズ人（5.5人）より多かったことを明らかにしていること〔W.J. Lowe, 1989, 60〕、また同時期におけるアイルランド人移民の職業の再帰性の割合が非アイルランド人より高かったことを指摘しているもの〔John Haslett and W.J. Lowe, 1977, 52〕、そこでは世帯類型がまったく検討されておらず、そこに問題が残されているといえるだろう。

また Frances Finnegan による『*Poverty and Prejudice*』では、地域的にアイルランド人移民が多いヨークを調査地にした1841～1871年のアイルランド人移民のモノグラフである。ここでは主に飢饉後におけるヨークでのアイルランド人移民によるゲットーコミュニティの形成、人口構造、職業が取り上げられている。とくにヨークにおけるアイルランド人移民の出生地（メイヨー州の出生者が1861年の32.2%で一番多い）および1841～1871年におけるアイルランド人の世帯規模、年齢・性別分布、就業状況（農場労働者と一般労働者の多さ）が明らかにされていることは興味深い、世帯類型が取り上げられていないのが残念である〔Frances Finnegan, 1982〕。

1990年代では D.M. MacRaild による『*Culture, Conflict and Migration*』や『*Irish Migrants in Modern Britain*』があげられるだろう。とくに後者はイギリスにおけるアイルランド人移民コミュニティの成長と発展が中心テーマである。そして第1にアイルランドからの出発とブリテンでの居住問題、第2にアイルランド人コミュニティにおける発展と適応が取り上げられているが、そこではアイルランド人移民の文化、宗教、政治的側面を中心に焦点をおきながらも、アイルランド人移民のストレスや緊張のみでなく、移民コミュニティを結合させる文化的残存や成長的なアイデンティティもまた取り上げているところが特徴といえるだろう〔D.M. MacRaild, 1999, p 1～2〕。

それ以外に Swift and S. Gilley 編の『*The Irish in Britain, 1815-1939*』〔1989〕に収録されている D. Fitzpatrick の「A Curious Middle Place: the Irish in Britain, 1871-1921」と Colin Pooley の「Segregation or Intergration? the Residential Experience of the Irish in mid-Victorian Britain」の2つの論文はイギリスにおけるアイルランド人移民を検討するときに、価値ある論文であるといえる。また Colin Pooley and Jean Turnbal 『*Migration and Mobility in Britain since the 18th Century*』〔1998〕、T.M. Devine 編集による『*Irish Immigrants and Scottish Society in the Nineteenth and Twentieth Centuries*』、S. Fielding による『*Class and Ethnicity, Irish*

Catholics in England, 1880-1939』, Roger Swift & Sheridan Gilley 編『*The Irish in Victorian Britain, Local Dimension*』[1999]などを最近の移民研究としてあげることができる。

さらにアイルランド移民をあらゆる角度から捉えている P. O'Sullivan 編集による『*The Irish World Wide, Volume 1-6*』シリーズ全6巻も挙げておかねばならないだろう。また日本では斎藤英里による一連の研究成果があり、「19世紀のアイルランドにおける貧困と移民」[1985], 「アイルランド人季節移民と19世紀のイギリス農業」[1990], 「19世紀イギリスにおけるアイルランド人移民の特質」[2000]の論文をあげておこう。ここではこれらの文献をそれぞれ詳細に検討することはできないが、全体的に移民送出元のアイルランドと受入れ国の両者を比較論的にアプローチした研究は意外に少なく、さらにアイルランド人移民の家族を視野に入れた研究はほとんど見当たらないのである。

したがって以上のようなアイルランド人の移民研究に対してアイルランド人移民の家族研究には移民送出元のアイルランドの家族史的研究をベースに受入れ国でのアイルランド人移住者の家族の適応および伝統性の維持あるいは変化を追究するという比較家族史的研究の視角が必要であるといえる。

そのため前稿〔清水, 2006〕と重複すると思われるが、ここでは L.H. Lees による『*Exiles of Erin — Irish Migrations in Victorian London*』と経済史の T.W. Guinnane, C.M. Moehling and C. ÓGráda による『*The Fertility of the Irish in America in 1910*』の2つの研究を以下で取り上げておきたい。

Lees による研究を検討する理由はヴィクトリア時代において送出元のアイルランドの家族と移住先のロンドンにおけるアイルランド人移民の家族を比較史的に捉えているからである。Lees はロンドンの1851年と1861年のセンサス原簿のサンプルをデータとしてロンドンで一番アイルランド人移住者が多いといわれる St.Giles, Whitechapel, St. Olave の3行政区を調査対象地区としてそれらの家族構造を追究している。Lees によればアイルランドの家族は基本的に都市、農村ともに核家族であり、家族周期により核単位を越えた親族を含むことがあるという見解を提示しており〔L.H. Lees, 1979, 124〕, そこから判断すれば、彼女のスタンスは核家族論的アプローチであるとみてよい。そして F.J. Carney によるセンサスのサンプル・データ〔F.J. Carney, 1980, 149-165〕にもとづいた1821年におけるレンスター、アルスター、コノートの5州における世帯サンプルから判断してほぼ70%が核家族であり、それらに対して1821年に中部アイルランドと西部アイルランドで17.2%が拡大家族であったものの、それが世帯主のライフサイクルに基づくもので、しかも世帯主の65歳がピークであることを Lees は明らかにしている〔L.H. Lees, 1979, 126〕。そこからアイルランド農村家族における支配的タイプが核家族であったと結論づけたのである。そこには世帯主と親族関係をもたないサーヴァント、一時的訪問者、徒弟を含んでいたこと、さらに1821年には5.05人、1841年には5.4人と家族規模が大きかったこと、それは子供数の多さ（1840年代のダブリンで4.5人、農村地域で5.5人）に起因していることが明らかにされている〔L.H. Lees,

1979, 128]。

他方、Lees はそのようにアイルランドの家族構造を検討した後、ロンドンにおけるヴィクトリア期のアイルランド人移民の家族がアイルランドの飢饉以前の農村家族と類似して構造化されているものとみる。すなわち多くの移民家族が親+未婚の子供を単位とする核家族世帯であり、他の親族、同居人、一時的訪問者が世帯編成に加わる可能性もあるが〔Lynn H. Lees, 1979, 130〕、そのような一時的に逸脱した形態をとるとしても基本的には受入れ国の社会に適合させようとする核家族規範により世帯編成に調整作用が働くというプロセスが明らかされており、そこに彼女のアイルランド人移民の家族構造研究の特徴が顕著に認められるのである。

さらにロンドンにおけるアイルランド人移民の家族規模はロンドン全体の家族規模より小さく、また飢饉以前のアイルランドの農村家族よりも規模的に小さかったことを明確化させている〔L.H. Lees, 1979, 136〕。つまりアイルランド人移民はロンドンへの移住後、アイルランドの農村社会よりもホスト社会の家族構造に類似させて適応していったのである。そして移住後のアイルランド人移民の家族規模は、世帯主の年齢、社会的、経済的地位により変化がみとめられるものの、アイルランド人移民家族の平均規模は飢饉前のアイルランド家族よりは小規模であったと結論付けている。

そのような Lees の結論と同じことを W. Guinnane, C.M. Moehling and C. ÓGráda による『*The Fertility of the Irish in America in 1910*』のアメリカにおけるアイルランド人移民の研究において確認することができるのである。彼らはアイルランド人がアメリカの移住先で家族を小規模化させた説明変数として出生力パターンをあげている。そこでは家族規模に関する興味深い仮説としてつぎの3点が提起されている。

すなわち第1にアメリカにおけるアイルランド人の家族はアイルランドでの農村と都市家族より規模が小さく、伝統的出生力パターンに明らかな出生力コントロールが作用しているとみている。第2にそのようなコントロールにも関わらず、アイルランド系アメリカ人は大家族を持続させようとしており、それはネイティブなアメリカ人よりも家族規模が大きく、アイルランド系アメリカ人は大家族をそこに選択しているという。第3にそのようなアイルランド系アメリカ人の出生力パターンは移民であるという結果に基づくものではなく、これらの高い出生率は移民集団におけるこれまでのアイルランドでの人口学的特徴から説明されるべきであると考えられている〔T.W. Guinnane, C.M. Moehling and C. ÓGráda, 2002, Abstract〕。

そのような仮説にもとづいてアメリカへのアイルランド人移民の家族はアイルランドの残留者家族よりも小家族であり、平均子供数がアイルランドの都市や農村よりアメリカでは少ないことを指摘している。そしてアイルランドの移住元では出生力コントロールが実施されていなかったが、アイルランド農村からアメリカへの移民はそのコントロールを取り入れ、アイルランドの農村家族や都市家族より小家族を選択したことが1910年のセンサスサンプル

で確認されている [T. W. Guinnane, C. M. Moehling and C. ÓGráda, 2002, 31]。とくにアイルランド人移民の第一世代で平均出生子数は6.5人であったが、第二世代では4.9人に減少させていたのである。ちなみにそれはアイルランド本国では都市部で6.9人、農村部で7.7人であった [T. W. Guinnane, C. M. Moehling and C. ÓGráda, 2002, 35]。そのような出生力コントロールには結婚パターンの変化、つまり晩婚化と未婚化の要因もそこに影響しているものと見られる。

以上のように Lees は移民元のアイルランド家族的特性とロンドンへの移住後の家族的特性の比較史的検討によりアイルランド人移民における核家族支配説と小家族化を明らかにしたのであり、T. W. Guinnane, C. M. Moehling and C. ÓGráda はアイルランド人移民家族の縮小化の原因を出生力コントロールから説明しようとしたのであった。そのような知見を参考にして筆者はイギリスにおけるアイルランド人移民の家族構造に関する仮説を以下のように提起しておきたい。

筆者はアイルランドにおける1821年と1841年のセンサスデータによりアイルランド農村家族の支配的家族形態が核家族であったことをすでに確認している。したがって筆者は19世紀中期まで基本的に Lees の立場に異論はない。しかしアイルランドの家族は19世紀半ば以降に大きく変化するのである。すなわち筆者はこれまでアイルランドにおける1821～1911年の人口センサス個表 (Census Returns) を利用して19世紀から20世紀にかけての家族構造を検討してきた。アイルランドでは19世紀初頭から中期までアイルランドの家族構造は核家族世帯が支配的形態であったが、19世紀中期以降からの不分割相続への変化、縁組婚の浸透により拡大家族世帯が増加し、特に直系家族を含む多核家族世帯の存在を20世紀初頭に確認することができた [清水, 2005, 71-4]。ところが、アイルランド本土で直系家族形成および不分割相続から排除された継承者以外の家族員はアイルランドで未発達な工業都市で就業するよりも海外へ単身による移住を求めたのである。

そしてアイルランド人移民は受入れ国の社会に適應する努力をしながら、最終的にそれは個人単位による適應よりむしろ家族を形成し、家族単位で最大限の幸福を求めするために家族員全員が就労する形態を選択し、できるだけ単純な家族編成による家族戦略をもとめたものと思われる¹⁾。それゆえ家族構造も単純な家族世帯が支配的構造になってくるのであり、移民元の家族構造と相違した家族形成を選択したのである。しかし他方では受入れ国の家族と相違する伝統的性格やそれらを修正して独自の家族戦略を追求しようとしているところも認めら

1) 家族戦略 (family strategy) という概念が最近よく使われるようになった。家族戦略の概念は結婚のタイミング、何人の子供を持つか、拡大親族との居住、家の外で働くべき人は誰なのかというような場合のように、家族成員を家族のポジションにどのように配置するのかを決定する分析に有効であるといえる。David, Cheal, *The One and the Many: Modernity and postmodernity*, in Graham Allan (ed.), *The Sociology of the Family*, Blackwell, 1999, 68. 最初に家族史研究で家族戦略の概念を使ったのは Michael Anderson, *Approaches to the History of Western Family 1500-1914*, 1980. (M・アンダーソン, 北本正章訳『家族の構造・機能・感情』, 海鳴社, 1988, 120-136)においてであろう。Lynn Lees にも移民が家族の生存維持戦略であったという視点が認められる [Lynn Lees, 1976, 29]

れるのである。それはたとえばアイルランド本国よりも出生率の減少（家族計画の実施）、子供の未婚化や晩婚化、老親の扶養が家族戦略として選択されたことに現れている。しかし、先稿〔清水、2005〕で明らかにしたように同じ血縁、親族、地縁などの同じ民族的アイデンティティを持つ人々を世帯編成に内包させることは移民家族で一般的にみられるのであり、イギリスでもそれは明らかに認められたのである。そしてそれは一時的な家族のライフサイクルの一段階による世帯編成であるとするべきであろう。またそれらの人々を世帯に内包させることも家族戦略の1つであったとみられよう。以上のようなアイルランド人移民に関する仮説にもとづいて以下においてイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民の家族構造とネイティブなイングランド・ウェールズの家族構造の比較をすることにしたい。

3. アイルランド人移民の人口学的側面

まず本稿では筆者はアイルランド人移民を捉えるアプローチとして伝統的なプッシュ要因・プル要因の図式をとりあえず採用しておきたい。しかし、ここでは単に送り出し国側の原因であるのプッシュ要因と受け入れ側のプル要因が相互規定的な関係で、単に2国間に限定されるものと捉えるのではなく、さらに媒介的な役割を果たす国の存在が含まれている図式、つまりクロス・ナショナル（Cross-national）な性格をもつ図式であると考えておきたい〔Kevin Kenny, 2003, 135〕。すなわちアイルランド人移民の場合、まず隣国のイギリスへ移民し、それを媒介にしてアメリカ、カナダへ再移民する可能性もそこに強く認められるからである。そして本稿では以下で検討するイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民に関係する限りにおいて、移民元の人口学的側面に検討を限定しておくことにしておきたい。それはイングランド・ウェールズでのアイルランド人移民を検討するために最小限必要な検討であると思われるからである。

したがってここではアイルランド人移民のプッシュ要因になる経済的、社会的要因は原則的には取り扱われていないことを意味している。

まず、アイルランドの人口数を Table 1 で1821年から1971年まで見ておこう。

これまでアイルランド人移民は1845年の大飢饉以前より移民や農業労働者としての出稼ぎで移動がみられたことは確認されているが、大飢饉はアイルランド人移民を激増させたことは間違いない。すなわちアイルランドの人口は飢饉以前の1841年には800万人以上であったのに対して、飢饉後の1851年には約20%減少し、650万になっており、この10年間に150万人が飢餓や病気で死亡したか、他国へ移住したことを明らかに確認することができる。それ以降もアイルランドの人口は減少し続け、1961年には飢饉以前の半数になっているのである。

性比をみておくと飢饉前の1841年までは女性1.0に対して男性が0.96か0.97で女性が少し多い傾向にあったが、飢饉後の1851年に0.95に減少したものの、それ以降序々に増加し1911年には1.0まで回復しており1911年まで変化がなかったと見てよい。その特徴は Collins の指摘と同じといえる〔Brenda, Collins, 1993, 367〕。それを逆にいえば、後述するように人口減少

Table 1. Population of Ireland 1821 to 1971

	Male	Female	Total	Percentage change
1821	3,341,926	3,459,901	6,801,827	
1831	3,794,880	3,972,521	7,767,401	+14.19
1841	4,019,576	4,155,548	8,175,124	+5.25
1851	3,190,630	3,361,755	6,552,385	-19.85
1861	2,837,370	2,961,597	5,798,967	-11.5
1871	2,639,753	2,772,624	5,412,377	-6.67
1881	2,533,277	2,641,559	5,174,836	-4.39
1891	2,318,953	2,385,797	4,458,775	-9.08
1901	2,200,040	2,258,735	4,458,775	-5.23
1911	2,192,048	2,198,171	4,390,219	-1.54
1926	2,114,977	2,113,576	4,228,553	-3.68
1936	2,143,608	2,104,557	4,248,165	+0.46
1951	2,174,416	2,157,098	4,331,514	+1.96
1961	2,110,773	2,132,610	4,243,383	-2.03
1966	2,172,916	2,195,861	4,368,777	-2.96
1971	2,250,436	2,263,877	4,514,313	+3.33

Source: W. E. Vaughan and A. J. Fitzpatrick, 1978, p. 3

に男女比の差が見られないことは移民数に関しても男女による性差に相違がなかったとみてよいといえる。

つぎにアイルランド人移民はどのような地方から移住したのかを示したのが Table 2 である。ここでは移民元を当該研究の時代に限定しておくが、大飢饉以前には主にアルスター (Ulster) とレンスター (Leinster) が多く、飢饉後はアイルランド北部の豊かな地帯ではなく、移民元が西部のコノート地方 (Connaught) の最貧地帯でもなく中間地帯である南東部へ移動していることが明らかにされている。すなわちコノート地方であるアイルランド西部は東部と比較して耕地に対する人口圧が高く、社会的分業も展開されず、最貧地帯であった

Table 2. Percentage of the Emigrants from each Province (%)

		Leinster	Munster	Ulster	Connaught	N (persons)
1880	Males	16.7	32.6	30.4	19.7	50189
	Females	17.0	31.3	28.2	23.2	45668
	Total	16.8	32.0	29.3	21.4	90857
1890	Males	18.3	38.7	23.3	19.3	31449
	Females	15.7	37.9	23.2	23.3	29986
	Total	17.0	38.3	23.2	21.3	61435
1900	Males	9.1	38.8	20.1	16.0	23295
	Females	7.3	37.3	20.0	33.6	23812
	Total	8.1	38.3	20.0	29.8	47107
1910	Males	13.3	24.2	40.2	20.1	18113
	Females	12.4	26.6	33.7	26.7	14810
	Total	10.7	20.9	30.7	19.0	39923
1920	Males	10.5	33.6	24.5	14.2	6075
	Females	11.2	28.2	29.5	30.9	9510
	Total	10.9	30.3	34.0	24.4	15585

Source: BPP, Emigration Statistics of Ireland, 1881, 1890-1, 1901, 1911, 1921

が、借地農の土地に対する執着心が強く、移民に対する抵抗感も強かったこと、貧困のために渡航資金の調達が困難であったことがあげられている〔斎藤, 1985, 84〕。

そこで本稿の対象時期である1880年以降の移民数を10年単位で見ると、アイルランド人の移民数は1860年代を第2のピークに、1880年が第3のピークを形成し、それは9万人に達しているが、それ以降減少していることは明確に認められるのである。そして移民元の地域を見れば1880年にはマンスター（Munster）が一番多く、それは32.0%を占め、以下アルスター、コノート、レンスターという順序を示している。1900年にはコノートが二位に上昇し、レンスターが激減してくる。1910年にはアルスターが一位になり、マンスターを追い越すことになる。しかし全体的に見れば最貧地域であるコノートが各年次において移民数の少なさが特徴としてあげられるであろう。

男女差に関しては、マンスターとアルスターでは男性が多いのに対して、レンスターとコノートは逆に女性が多いという傾向が認められるが、その理由をここでは明らかにすることができない。

つぎにアイルランド人の移住元と移住先を地方別に示したのが Table 3 である。

それを見れば、1880年から1920年にわたってアイルランドのすべての地方でアメリカへの

Table 3. Percentage of Destination of the Emigrants from each Province (%)

	Province	America	Australia	Canada	England & Wales	Scotland	N (persons)
1880	Leinster	83.9	2.7	2.2	7.9	1.5	16169
	Munster	79.7	3.2	0.8	12.5	0.4	30654
	Ulster	62.4	2.6	7.6	7.5	18.5	28122
	Connaught	92.8	2.0	1.4	2.3	1.1	20519
	N (persons)	74636	2576	3052	7741	5808	95517
1890	Leinster	86.7	6.3	1.7	4.2	0.2	10415
	Munster	84.4	4.6	1.1	9.1	0.4	23554
	Ulster	80.0	2.5	6.7	1.7	8.5	14277
	Connaught	94.5	2.0	0.9	1.3	1.2	13067
	N (persons)	52685	2338	1517	2998	1474	61313
1900	Leinster	73.4	7.9	3.1	13.8	1.0	3857
	Munster	87.5	1.3	0.4	9.7	0.9	17933
	Ulster	57.2	2.6	2.4	19.1	17.4	9438
	Connaught	98.3	0.4	0.3	0.3	0.6	14060
	N (persons)	37765	834	472	4123	1927	45288
1910	Leinster	68.9	4.5	13.0	9.3	1.4	4258
	Munster	93.4	1.9	0.9	2.4	0.4	8330
	Ulster	55.1	2.1	30.2	8.5	2.6	12271
	Connaught	97.8	0.2	1.2	0.3	0.4	7598
	N (persons)	24905	613	4416	1656	440	32457
1920	Leinster	69.2	0.8	5.0	19.0	5.3	1706
	Munster	95.1	0.2	1.8	2.4	0.1	4724
	Ulster	54.5	3.3	35.8	0.3	0.3	5300
	Connaught	98.1	0.3	1.0	0.4	0.1	3801
	N (persons)	12288	212	2109	469	113	15531

Source: BPP, Emigration Statistics of Ireland, 1881, 1890-1, 1901, 1911, 1921

移民が多いことに共通性がある。1880年ではアメリカへの移民が7.5万人で一番多く、以下、イングランド・ウェールズ、スコットランド、カナダ、オーストラリアという順序である。そしてそれを地方別でみておくとコノートが92.8%で、それはアメリカへの集中性を顕著に示し、以下レンスター、マンスター、アルスターという集中度の順序がそこに認められる。そしてその内訳をみておくと、レンスターではアメリカ以外にはイングランド・ウェールズが多い。マンスターに関して同じくアメリカが多いが、イングランド・ウェールズとオーストラリアへの移民も認められる。アルスターに関してはアメリカが他の地方と比較して一番低いのであるが、それに対してスコットランドが18.5%とかなり多く、そこにカナダの7.6%とイングランド・ウェールズの7.5%が加わり、他の地方とはかなり違った特徴がそこに認められる。そこにはプロテスタントという宗派的性格や経済的要因が反映されているものと推察される。最後のコノートでは一番アメリカに集中した分布を示していることが特徴といえる。

さらに移住先を州単位で示したのが Table 4 である。ここでレンスターのキング州とクイーンズ州は現在オフアリー州とリーシュ州に名称変更がなされている。レンスター地方では移民数はダブリンが一番多く、以下クイーンズ州、ロングフォード州、ミーズ州、ラウズ州、キルケニー州という順序である。移民先で見れば全体として当然アメリカが多いが、ダブリン、キルデア、ウエックスフォード、ウイックローはイングランド・ウェールズに多く、キルケニーはニュージーランドに、ミーズ、ウエストミーズはオーストラリアにも少し移住していることが読み取れる。

マンスターではコークが一番多く移住しており、以下ケリー、リムリックという順序を示している。移住先に関してやはり全体的にすべての地方がアメリカに集中させているが、ウオーターフォードの集中度が一番高い。それ以外にコークとリムリックがイングランド・ウェールズに、クレアがニュージーランドに、テップラリーが少しオーストラリアに多い傾向が認められる。

アルスターではアントリムが一番多いが、それ以外ではティローンとドニゴールであろう。移住先ではドニゴールがアメリカに一番多く移住しているものの、アントリム、アーマー、ダウンはイングランド・ウェールズ、スコットランドに、ロンドンデリーとティローンはスコットランドに、ドニゴール、ファーマナーはカナダに少し多いという傾向がそこから読み取れる。

コノートに関してはゴールウェイが少し多い分布を示すが、あまり州単位で移住数に相違が認められない。また移住先に関してもアメリカへの集中度がすべての州に認められるのであり、ゴールウェイのみ若干オーストラリアへの移住が認められる程度である。

この時期アイルランド人のイギリスへの渡航コースとしてロンドンデリー、ベルファストからグラスゴー、コークからブリストル、ロンドン、ダブリンからランカシャー、ヨークという主要な3つのコースがあり、上記の移住先の州単位の特徴はある程度それを反映してい

Table 4. Number of Emigrants from each County (1880, %)

County	America	Australia	New Zealand	Canada	England & Wales	Scotland	N (persons)
Carow	81.7	2.5	1.1	5.7	9.0	0.0	754
Dublin	71.1	1.3	0.6	5.6	16.3	2.5	2496
Kildare	88.3	1.6	0.0	0.4	9.2	0.4	1115
Kilkenny	82.5	2.3	6.3	1.7	4.0	0.4	1516
King's	90.1	3.5	0.4	1.0	3.1	1.9	1449
Longford	89.1	2.6	0.0	1.6	2.2	3.2	1647
Louth & Drogheda	90.2	1.0	0.1	1.4	4.6	2.7	735
Meath	90.0	4.1	0.3	1.1	3.1	1.3	1575
Queen's	92.8	1.2	0.0	0.6	4.3	1.0	1802
Westmeath	75.7	5.6	1.6	3.1	3.9	5.7	1133
Wexford	74.3	0.4	1.3	1.7	21.0	0.2	1225
Wicklow	80.5	3.0	0.9	1.2	13.2	0.6	672
Total of Leinster	83.8	2.7	1.1	2.2	7.9	1.5	16169
Clare	83.7	3.2	10.5	0.6	1.6	0.3	3735
Cork	71.1	3.3	0.5	0.7	24.2	0.1	10169
Kerry	87.3	2.2	0.7	0.8	8.5	0.0	5298
Limerick	78.2	3.2	5.0	0.6	10.9	2.1	4051
Tipperary	82.9	6.4	4.8	1.2	4.4	0.1	3930
Waterford	92.2	0.7	1.8	1.8	3.3	0.1	2675
Total of Munster	79.7	3.2	3.0	0.8	13.0	0.4	30654
Antrim	42.0	1.3	1.6	6.6	14.1	34.1	5738
Armagh	45.9	4.0	1.2	5.7	12.5	30.6	2384
Cavan	78.7	4.9	0.7	4.7	2.7	8.2	3012
Donegal	83.6	2.9	0.4	11.1	0.6	1.4	3433
Down	45.3	1.2	2.3	6.1	14.5	30.3	3239
Fermanagh	68.5	7.0	0.7	12.5	2.9	8.2	1607
Lodonderry	70.9	2.1	2.0	8.3	3.4	13.3	2950
Monaghan	72.7	0.8	0.0	4.8	7.8	13.9	1974
Tyrone	71.5	2.5	0.3	9.6	4.0	12.1	3785
Total of Ulster	62.4	2.6	1.1	7.6	7.6	18.6	28122
Galway	90.3	4.5	0.6	0.9	2.7	1.0	4887
Leitrim	90.7	1.3	0.0	2.9	2.4	2.7	3077
Mayo	95.6	0.3	0.1	0.4	2.4	1.1	5716
Roscommon	91.5	2.9	0.7	1.2	2.7	0.9	3012
Sligo	94.5	1.1	0.2	2.8	1.3	0.1	3727
Total of Connaught	92.8	2.0	0.3	1.4	2.3	1.1	20519
Total	78.1	2.7	1.5	3.2	8.1	6.1	95517

Source: BPP, Emigration Statistics of Ireland, 1881

るものといつてよいのではなからうか。

そこでつぎにアイルランド人の国外移住者の年齢構成を示したのが Table 5 である。

まず1880年におけるアイルランド人の移住者の年齢を見れば、男性では20～25歳が36.0%で一番多く、以下25～30歳の17.3%、15～20歳の13.4%であり、15～30歳で全体の66.7%を占めていることがわかる。つまり独身者で1850年代以降における不分割相続や縁組婚による直系家族の制度化により農村後継者として指名されなかった人々が排出された可能性が大きいとみなされよう。またベルファストやダブリンの都市化や工業化の遅れによる労働市場の未発達も移民をプッシュする要因とみなせるだろう。

Table 5. Age and Occupations of Emigrants of Ireland (1880, %)

Sex	Occupation	10~15	15~20	20~25	25~30	30~35	35~40	40~45	45~50	50~55	55~60	60~	N (persons)	
Males	Bakers and Confectioners	0.0	0.3	0.4	0.4	0.0	0.2	0.6	0.0	0.0	0.4	0.0	131	
	Blacksmiths	0.0	0.2	0.3	0.4	0.6	0.8	0.6	0.0	0.8	0.4	0.0	156	
	Boot and Shoe Makers	0.0	0.7	0.7	1.0	1.2	1.0	0.7	0.3	0.5	0.7	0.0	350	
	Carpenters and Joiners	0.1	0.7	1.2	1.8	1.9	1.4	1.6	0.6	1.1	1.4	0.3	579	
	Clerks and Accountants	0.1	1.4	1.2	1.4	1.1	1.4	1.6	0.4	0.5	0.4	1.0	546	
	Coopers	0.1	0.3	0.3	0.4	0.5	0.7	0.8	0.1	0.4	0.0	0.0	149	
	Farmers	0.0	2.3	1.8	2.1	5.1	9.9	24.0	21.4	29.3	21.6	23.7	1994	
	Labourers	22.2	85.0	88.9	84.4	80.4	74.5	63.0	69.0	60.8	70.2	64.5	36688	
	Masons and Paviers	0.0	0.2	0.3	0.7	0.8	0.7	0.3	0.3	1.0	0.9	0.0	0.3	201
	Mechanics	0.0	0.3	0.3	0.6	0.5	1.0	0.5	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	172
	Millworkers	0.6	0.4	0.3	0.4	0.5	0.7	0.4	0.3	0.1	0.0	0.0	176	
	Painters, Paperhangers, Plumbers and Glaziers	0.0	0.4	0.3	0.5	0.3	0.3	0.9	0.4	0.1	0.1	0.0	0.0	165
	Seamen	0.0	0.3	0.2	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.3	0.1	0.0	0.0	131
	Servants	0.6	0.9	0.7	0.9	0.9	0.9	0.2	0.5	0.3	0.3	0.4	0.0	337
	Shopkeepers	0.0	0.2	0.3	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2	0.1	0.3	0.0	0.0	117
	Spinners and Weavers	0.0	0.1	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.0	0.4	0.3	87
	Tailors	0.1	0.6	0.7	0.7	0.7	0.6	0.5	0.3	0.7	0.5	0.4	0.0	290
Trades and before specified	0.0	0.3	0.3	0.3	0.3	0.6	0.4	0.5	0.3	0.5	0.4	0.3	150	
Total Males	3.4	13.4	36.0	17.3	8.6	3.3	3.6	3.6	1.4	1.5	0.6	0.6	50189	
Dressmakers and Milliners	0.2	0.5	1.2	0.5	1.8	0.5	1.3	1.3	1.3	1.6	0.4	0.0	420	
Housekeepers	0.0	0.5	2.4	9.1	12.6	19.9	17.3	22.1	20.4	22.6	26.7	20.4	2004	
Servants	31.9	88.8	85.1	68.9	55.0	34.1	24.0	31.0	28.6	29.3	20.4	33304		
Total Females	4.2	24.7	35.3	10.5	5.5	2.4	3.8	1.2	1.5	0.6	0.6	45663		

Source: BPP, Emigration Statistics of Ireland, 1881

他方女性でも同じ傾向が認められる。すなわち20～25歳が35.3%で一番多く、以下15～20歳の24.7%、25～30歳の10.5%が続き、それらの15～30歳で70%を占めていることがわかる。そして移住前の職業を Table 5 で見ておくと、男性の場合年齢層において少し相違するものの、不特定の一般労働者が15～30歳層で一番多く、それは80%台を占め、それ以外では農民、事務・会計、大工・建具工が1～2%であるという特徴が見られる。他方女性に関しては、15～20歳層でサーヴァントが大部分であり、それは88.8%を占め、年齢的には15～30歳が70～90%の枠に入っている。なお年齢が上昇すればハウスキーパが20%近く占めるようになる。それらのアイルランド移民の移住前の職業を地方別に示したのが Table 6 である。

それをみれば男性では一般労働者が一番多く、特にコノートでは84%を占め、以下レンスター、マンスター、アルスターという順序を示している。そしてアルスターではその代わり農民が他の地方より少し多いという特徴が見られる。他方女性に関してはサーヴァントがすべての地方で多いものの、男性と同じくコノートの割合が一番高くなっている。

したがって、アイルランド人の移民元での職業に関していえば、ほとんどの男性が不特定の一般労働者、つまり未熟練・非熟練労働者であり、女性がサーヴァントであったとみなしてよいだろう。そして後述するように移民先においても同じような職業に就業する可能性の強さが証明されるであろう。

Table 6. Age and Occupations of Emigrants of Ireland (1880, %)

Sex	Occupation	Leinster	Munster	Ulster	Connaught	N (persons)
Males	Bakers and Confectioners	0.3	0.3	0.3	0.1	131
	Blacksmiths	0.4	0.3	0.4	0.2	156
	Boot and Shoe Makers	0.7	0.9	0.8	0.3	350
	Carpenters and Joiners	1.3	1.1	1.5	0.7	579
	Clerks and Accountants	1.0	1.0	1.7	0.2	546
	Coopers	0.1	0.5	0.4	0.0	149
	Farmers	1.9	2.4	8.2	1.9	1994
	Labourers	79.9	76.1	59.7	84.1	36688
	Masons and Paviers	0.4	0.5	0.4	0.3	201
	Mechanics	0.0	0.0	1.1	0.0	172
	Millworkers	0.0	0.0	1.1	0.0	176
	Painters, Paperhangers, Plumbers and Glaziers	0.2	0.4	0.4	0.0	165
	Seamen	0.0	0.6	0.0	0.0	131
	Servants	0.5	1.0	0.4	0.5	337
	Shopkeepers	0.4	0.1	0.4	0.0	117
	Spinners and Weavers	0.0	0.0	0.5	0.0	87
	Tailors	0.6	0.8	0.5	0.3	290
	Trades and before specified	0.2	0.3	0.5	0.0	150
Total Males	8405	16352	15241	9908	50189	
Females	Dressmakers and Millners	0.5	0.5	2.2	0.3	420
	Housekeepers	1.4	4.9	8.3	1.0	2004
	Servants	71.2	69.7	52.6	75.3	30304
	Total Females	7764	14302	12881	10611	45668

Source: BPP, Emigration Statistics of Ireland, 1881, xciv

4. イギリスにおける1881年センサスの概要

ここで本稿の対象国であるイギリスのセンサス制度自体を詳細に検討する余裕がないので、本稿の対象時期に関連する人口センサスの特徴を概観するにとどめておきたい。

イギリスのセンサス制度の代表的研究として Edward Higgs による『*A Clearer Sense of the Census*』(1996)と『*Making Sense of the Census*』(2005)をあげておこう。ところでイギリスのセンサスの開始は1801年である。しかし、信頼できるセンサスは1841年以降のセンサスである。1830年代における行政の機械化が1841年センサスに導入されたからである。また1834年の救貧法(Poor Law Amendment Act)制定により新しい行政区(administrative unit)が制定され、出生、婚姻、死亡の市民登録が開始され、その行政区がセンサスにも適用されたのである[E. Higgs, 1996, 8]。特に1851年以降のセンサスは信頼がおけるといわれているが、植民地であったアイルランドのセンサスにも同じことがいえよう。1851年センサスから世帯主との関係の項目が追加されたのであり、それ以降のセンサスから家族に関連する直接変数と構築変数(たとえば世帯類型)を利用することができるようになり、それは家族研究史には不可欠な項目であるといえよう。

筆者が利用している1881年センサスデータは最初 Essex 大学 Data Archive で入力されたものであるが、現在ミネソタ人口センターの NAPP プロジェクトでも利用することができる。つまり1881年センサスは Table 7 のような形式がイングランド・ウェールズで採用されたのである。調査時期は1881年4月3日の日曜日であり、その日の夜に居住地に滞在しているか眠っている家族員、訪問者、同居人、サーヴァントが対象者である。そして調査項目は名前、姓、世帯主との関係、結婚状況(既婚、死別、未婚)、性、最後の誕生日の年齢、職業、出生地(イングランド・ウェールズの州別、スコットランド、アイルランド、イギリス植民地)である。またスコットランドにおける1881年のセンサスにも同じ形式が採用されている。

しかし、イングランド・ウェールズとスコットランドのセンサスには当日不在であった世帯主(たとえば軍隊所属、病院入院など)の情報を得ることができないのであり、それは家族分析に1つの大きな問題点であるといえよう。

5. アイルランド人移民の地域的属性

まずグレート・ブリテンとアイルランドにおける1841~1931年までの人口およびグレート・ブリテンにおけるアイルランド人移民数を歴史的に概観しておこう。Table 8 をみれば、イングランド・ウェールズの人口は1851年には1800万人であったが、1871年には2000万人、1901年に3000万人に増加していつている。それに対してスコットランド人移民が同期間に13万、21万人、31万人と増加し、アイルランド人移民は大飢饉の影響で1841年の29万人から1851年には52万人に急増し、それ以降1861年(60万人)まで増加し続けているが、1871年

Table 8. Census of Population by Birthplace, Great Britain and Ireland (unit: 1000 persons)

Birthplace	1841	1851	1861	1871	1881	1891	1901	1911	1921	1931
Enumerated in England and Wales										
All Place	15914	17928	20066	22712	25974	29003	32528	36070	37887	39952
England & Wales	15442	17166	19120	21692	24859	27883	31270	34464	36392	38492
Scotland	104	130	169	213	254	282	317	322	334	366
Ireland	291	520	602	567	562	458	427	375	365	381
Foreign Countries	39	62	102	139	174	233	339	374	329	328
Enumerated in Scotland										
All Place	2620	2889	3062	3360	3736	4026	4472	4761	4862	4843
England & Wales	38	47	56	70	92	111	134	165	194	169
Scotland	2439	2623	2766	3062	3398	3669	4086	4366	4467	4496
Ireland	126	207	204	208	219	195	205	175	159	124
Foreign Countries	3	4	4	5	6	9	30	36	33	28
Enumerated in Northern Ireland										
All Place	1646	1441	1396	1359	1305	1236	1237	1251	1257	1280
England & Wales	4	6	7	11	13	18	20	26	29	27
Scotland	3	6	7	9	11	15	19	24	24	22
Ireland	1638	1428	1380	1325	1264	1183	1191	1193	1195	1222
Foreign Countries	1	1	2	2	3	3	5	5	5	5
Enumerated in Southern Ireland										
All Place	6529	5112	4403	4053	3870	3469	3222	3140	2972	2966
England & Wales	18	29	44	56	56	57	57	65	37	36
Scotland	5	6	10	11	11	12	11	15	12	11
Ireland	6503	5069	4340	3982	3799	3399	3136	3040	2905	2903
Foreign Countries	3	6	6	9	9	10	12	14	13	14

Source: HMSO, External Migration, 1953, 15

それらはアイルランドの人口減少がグレート・ブリテンにのみ吸収されているわけではないことを明らかに示している。つまりアイルランド人はアメリカへ1851～60年には99万人、1861～70年に69万人、1871～80年に45万人、1881～90年に63万人移民しており〔*Commission on Emigration and Other Population Problems, 1949-1954 Reports*, 1954, 124〕、それをイングランド・ウェールズと比較すればアメリカへの移民数の規模が桁外れであることが一目瞭然である。アメリカへの移民はアメリカへの直接移民とイギリスを中継地としてアメリカへいく経由移民の両方があると考えられるのである。なおアメリカにおけるアイルランド出生者をみれば、1880年で185.5万であり、この時期が一番多く、それ以降減少し1910年に135.2万人、1920年には103.7万人になっている〔Walter Nugent, 1992, 151〕。

以上のようにイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民はアメリカへの移民に比べて少ないものの、アイルランド人にとってイングランド・ウェールズへの移民は距離的、費用的に比較的容易な移民先であったと考えられるのである。

そこで筆者は NAPP プロジェクトにおける1881年のイギリスセンサス原簿 (schedule) のデータベースを用いてイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人移民の家族構造およびネイティブなイングランド・ウェールズの家族構造を比較史の視点から検討するのであるが、その原簿でカテゴリー化されているアイルランド出生者には一世は含まれるものの、イギリスで出生した二世や三世が含まれていないという問題点が依然残されたままであるこ

Table 9. Numbers of Population of England and Wales by Division (1881, %)

	Irish	England-Wales	Total
Eastern	1.3	5.3	5.2
Islands	0.6	0.5	0.5
London	14.5	14.4	14.7
Monmouth/Wales	3.9	6.2	6.1
Northern	11.7	6.2	6.3
North-Midland	2.0	6.5	6.3
North-Western	40.1	13.9	14.4
South-East	5.4	9.7	9.6
South -Midland	1.7	6.9	6.8
South-Western	2.3	7.3	7.2
West-Midland	6.0	11.9	11.7
Yorkshire	10.4	11.3	11.2
N (persons)	544596	24871802	25864702

Source: NAPP GB 1881 Datafile

とを付け加えておく。将来アイルランド出生者の移民でイギリスやアメリカで出生した子供（19歳以下の同居）をデータに加えて検討したいと考えている。しかしここでの分析データはそれらの子供を除外したデータである。

以下ではイングランド・ウェールズにおけるアイルランド人の移民状況を踏まえたうえでアイルランド人移民の家族構造およびネイティブなイングランド・ウェールズの家族構造を分析することになるが、まずアイルランド人移民のイングランド・ウェールズにおける地域的屬性をみておこう。

Table 9 はセンサスの地域区分によりアイルランド出生者とイギリス出生者（以下ではイングランド・ウェールズの出生者のことを示している）をクロス集計したものである。1881年におけるイギリス全人口に占めるアイルランド出生者は2.1%の55万人弱である。1841年から1971年のアイルランド出生者のイングランド・ウェールズに占める割合は最高時の1861年で3.0%であり、それらは1845年の大飢饉の影響があるものと判断されるが、1881年においても大飢饉によるアイルランド移民の家族を捉える視点からしてもこの時期は重要な時期とみなされてよいだろう。それを地域区分からみればアイルランド出生者が分布する地区は北西部イングランドで40.1%を占め、以下ロンドンの14.5%、北部イングランドの11.7%、ヨークシャーの10.4%という順序を示し、それらの4地域で全体の76.7%を占め、それらの地域への集中分布がそこに顕著に認められるのである。

すなわち全体の人口分布と比較すれば、突出している地域は北西部イングランドと北部イングランドである²⁾。それらの傾向をさらに州単位で示したのが Table 10 である。

2) 地域区分と州区分の関係をみておくとつぎのようになる。1. London=The intra-metropolitan area of Middlesex, Kent and Surrey, 2. South-Eastern Division=Surrey & Kent (extra-Metropolitan), Sussex, Hampshire, Berkshire, 3. South Midland Division=Middlesex (extra-Metropolitan), Hertfordshire, Buckinghamshire, Oxfordshire, Northants, Bedfordshire, Cambridgeshire, 4. Eastern Division=Essex, Suffolk, Norfolk, 5. South-Western Division=Wiltshire, Dorset, Devonshire, Cornwall, Somersetshire, 6. West-Midland Division=Gloucestershire, Herefordshire, Shropshire, Staffordshire, Worcestershire, Warwickshire, 7. North-Midland Division=Leicestershire, Rutland, Lincolnshire, Nottinghamshire,

Figure 1: Map of England and Wales



Source : William E. Van Vugt, Britain to America, 1999, p. 28.

Table 10. Numbers of Population and Households in England & Wales (1881, %)

County	Population			Household		
	Irish	Non-Irish	Total	Irish	Non-Irish	Total
Anglesey	0.1	0.1	0.1	0.0	0.2	0.2
Alderney	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
Bedfordshire	0.2	1.2	1.2	0.1	1.3	1.2
Berkshire	0.3	1.0	1.0	0.2	1.0	1.0
Brecknockshire	0.1	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2
Buckinghamshire	0.1	0.6	0.6	0.1	0.7	0.6
Caernavonshire	0.1	0.5	0.5	0.1	0.5	0.5
Cambridgeshire	0.1	0.8	0.7	0.1	0.8	0.8
Cardiganshire	0.0	0.4	0.4	0.0	0.4	0.4
Carmarthenshire	0.1	0.4	0.9	0.1	0.5	0.4
Cheshire	1.3	0.9	0.9	1.4	0.9	0.9
Cornwall	0.3	1.3	1.3	0.3	1.4	1.3
Cumberland	2.5	0.9	1.0	2.5	0.9	1.0
Denbighshire	0.2	0.4	0.4	0.2	0.5	0.5
Derbyshire	0.9	1.5	1.5	0.8	1.5	1.5
Devonshire	1.2	2.4	2.4	0.9	2.5	2.5
Dorset	0.2	0.7	0.7	0.1	0.8	0.7
Durham	6.7	3.3	3.4	7.7	3.1	3.3
Essex	0.9	2.2	2.1	0.8	2.2	2.1
Flintshire	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
Glamorganshire	2.1	2.0	2.0	2.1	1.9	1.9
Gloucestershire	9.9	2.1	2.0	0.9	2.1	2.1
Guernsey	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
Hampshire	1.6	2.2	2.2	1.2	2.3	2.2
Herefordshire	0.1	0.5	0.5	0.1	0.5	0.5
Hertfordshire	0.1	0.8	0.8	0.1	0.8	0.8
Huntingdonshire	0.0	0.2	0.2	0.0	0.2	0.2
Isle of Man	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2
Jersey	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
Kent	2.9	3.8	3.8	2.6	3.7	3.7
Lancashire	38.5	13.0	13.5	38.5	12.1	13.0
Leicestershire	0.3	1.3	1.3	0.3	1.4	1.3
Lincolnshire	0.3	1.8	1.8	0.3	1.9	1.9
Merionethshire	0.0	0.3	0.3	0.0	0.3	0.3
Middlesex	10.9	11.0	11.3	11.0	10.9	11.2
Monmouthshire	0.9	0.9	0.9	1.0	0.9	0.9
Montgomeryshire	0.0	0.3	0.3	0.0	0.3	0.3
Norfolk	0.2	1.7	1.7	0.2	1.9	1.9
Northamptonshire	0.2	1.1	1.1	0.2	1.2	1.1
Northumberland	2.3	1.7	1.7	2.7	1.6	1.7
Nottinghamshire	0.5	1.7	1.7	0.4	1.8	1.7
Oxford	0.1	0.7	0.7	0.1	0.8	0.7
Pembrokeshire	0.2	0.3	0.3	0.1	0.3	0.3
Radnorshire	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1
Rutland	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1
Shropshire	0.4	1.1	1.0	0.4	1.1	1.0
Somerset	0.4	1.9	1.9	0.4	2.0	2.0
Sttfordshire	2.4	3.9	3.9	2.7	3.7	3.7
Suffolk	0.2	1.4	1.4	0.2	1.5	1.5

Derbyshire, 8. North-Western Division=Cheshire, Lancashire, 9. Yorkshire Division=Yorkshire (North, East and West Ridings), 10. Northern Division=Durham, Northumberland, Cumberland, Westmorland, 11. Wales Division., Matthew Woollard with Mark Allen, *1881 Census for England and Wales, the Channel Isles and the Isle of Man: introductory user guide v. 0.4*, History Data Service The Data Archive, University of Essex, 1999, 55-6.

Surrey	4.3	5.5	5.6	4.1	5.4	5.4
Sussex	0.6	1.9	1.9	0.5	1.9	1.8
Warwick	1.7	2.9	2.8	1.9	2.9	2.8
Westmorland	0.1	0.3	0.2	0.1	0.3	0.2
Wiltshire	0.1	1.0	1.0	0.1	1.1	1.0
Worcestershire	0.4	1.5	1.5	0.4	1.5	1.5
Yorkshire Esat	1.0	1.4	1.4	1.0	1.4	1.4
Yorkshire North	1.5	1.3	1.3	1.4	1.3	1.3
Yorkshire West	7.9	8.6	8.5	8.5	8.7	8.6
On board ship	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
N (persons) l	547511	24896343	25894983	180113	5089880	5360148

Source: NAPP GB 1881 Datafile

それは北西部イングランドではランカシャーが一番多く40.1%のうち38.5%を占め、以下ロンドンを含むミドルセックスの10.9%とサリーの4.3%、西ヨークシャーの7.9%、ダラムの6.7%という分布をそれぞれ示している。したがってアイルランド人移民はこれらの5州に68%を集中させているのである。つまりアイルランド人移民は工業地帯に集中していたのであり、とくにこの時期においてもランカシャー州においてリヴァープール、マンチェスター、プレストン、ボルトン、ウエストダービーなどの工業都市に集中度が高かったのである。また世帯数においても人口とほぼ同じ傾向を読み取ることができる。

さらにこのように特定の地域に集中分布したアイルランド人移民の分布状況を農村―都市という区分で示した Table 11 で集中地域を再確認しておく、アイルランド出生者は農村に57.3%、都市に42.1%であり、それは一見農村分布が多いものと見られるが、それをイギリス出生者（74.4%と25.5%）あるいはイギリス全体（73.7%と26.2%）と比較すればアイルランド出生者の都市における比重が圧倒的に高いことが明確に読み取れるのであり、それは工業地帯での移民の集中度を裏付けるものいえる。

Table 11. Percentage of Birthplace of Rural and Urban (1881, %)

	Irish	England & Wales	Total
Rural	57.3	74.4	73.7
Urban	42.1	25.5	26.2
Other	0.5	0.1	0.1
N (Persons)	547511	24896343	25894983

Source: NAPP GB 1881 Datafile

さらに Table 12 は人口密度とアイルランド出生者とイングランド・ウェールズ出生者をクロス集計したものである。それによるとイングランド・ウェールズ出生者は人口密度と関係なく分散した居住がみとめられるが、アイルランド出生者の場合には全体的には1エーカー当たり4人以上から増加し始め、とくに75人以上という人口密度の高い地域でアイルランド出生者が27.6%、イングランド・ウェールズ出生者が13.5%であり、それは2倍である割合を示しており、アイルランド人移民がいかに人口密集地に居住していたかを明確に示したものと理解することができる。以上からアイルランド出生者の移民の居住とイングランド・ウェールズ出生者の居住のコントラストが明確に認められ、アイルランド出生者の場合都市

Table 12. Percentage of Household Heads by Population Destiny of Parish (1881, %)

Population density of parish	Ireland	England & Wales	Total (%)	N (households)
0-0.3 persons per acre	2.0	16.3	5.4	843945
0.3-1 persons per acre	4.0	14.3	6.3	743168
1-4 persons per acre	13.5	17.5	10.3	925073
4-12.5 persons per acre	17.2	15.3	13.4	823854
12.5-33 persons per acre	18.2	11.2	13.3	612855
33-75 persons per acre	17.5	11.6	16.0	636570
75-persons per acre	27.6	13.6	35.3	774662
N (households)	180113	5089880	100.0	5360148

Source: NAPP, GB 1881 Datafile

部で、人口密度の高い特定の地域に集中的に居住していることが明白にデータで確認することができたのである。それがネイティブのイングランド・ウェールズ出生者と大きな相違とみてよいだろう。

6. イングランド・ウェールズにおける家族構造

筆者はすでにこれまでの研究でアイルランドの人口センサス個票をもちいて19世紀から20世紀初頭の家族構造を明らかにしてきた。そこでは19世紀初頭から中期までアイルランドの家族構造は核家族世帯が支配的形態であったが、19世紀中頃からの不分割相続への変化、縁組婚の浸透により拡大家族世帯が増加し、特に直系家族を含む多核家族世帯の存在を20世紀初頭に確認することができた〔清水, 2004, 55-6〕。ところがアイルランド本土で直系家族形成および不分割相続から排除された継承者以外の人々はアイルランドでは未発達な工業化の都市での就業よりも海外への移住を強く求めたのである。それがプッシュ要因の1つとみなされるのである。そして1845年の大飢饉以降イギリス、アメリカ、カナダへの移民が増加し、彼らはそれぞれの国で特定のコミュニティを形成しながら移民先の社会に適応していくことになるのである。

ところが、それらのアイルランド人移民の家族はどのような特徴を持っていたのかという問題を直接数量的に示してくれる研究はこれまでほとんどなかったといえよう。筆者の当面の問題関心はアイルランド人移民がイギリス、アメリカ、カナダという国でどのように家族形成をしていったのかという問題を解明することにある。そこで以下においてアイルランドからイギリスへの移民の家族を移民先であるイギリスにおける人口センサス原簿の分析をとおして明らかにしておきたいのである。

① イングランド・ウェールズの世帯規模

Table 13 は出生地別に世帯規模を示したものである。それによるとイングランド・ウェールズでは1～4人では世帯規模が多いが、5人以上ではアイルランド出生者の方が多いという特徴を示している。そこには以下で見ると子供数の要因が強く影響しているものとみられよう。

Table 13. Size of Households in England & Wales (1881, %)

Persons	Ireland	United Kingdom	Unknown	Total	N
1	4.3	4.6	6.4	4.6	246272
2	14.0	15.3	14.4	15.2	812132
3	14.8	16.9	15.0	16.8	898109
4	14.8	16.1	14.6	16.0	856510
5	14.0	14.1	13.2	14.1	752228
6	12.0	11.5	10.9	11.5	612401
7	9.5	8.5	8.5	8.5	455744
8	6.9	5.7	6.2	5.8	308934
9	4.4	3.5	4.1	3.5	186953
10-	5.4	3.9	6.7	4.0	212379
Total	100.0	100.0	100.0	100.0	5341662
N	178446	5073936	89280		5341662

Source: NAPP, GB 1881Datafile

Table 14. Size of Households and Families in England & Wales (1881, %)

County	Birth Place	Household		Family	
		Average	N (households)	Average	N (households)
Anglesey	Ireland	4.94	70	4.49	70
	England & Wales	4.13	8232	3.68	8239
Alderney	Ireland	3.55	11	3.45	11
	England & Wales	4.27	298	3.93	298
Bedfordshire	Ireland	4.87	238	7.18	244
	England & Wales	4.50	65794	7.15	65958
Berkshire	Ireland	4.81	302	3.97	324
	England & Wales	4.54	50869	4.04	51203
Brecknockshire	Ireland	4.34	144	4.00	153
	England & Wales	4.57	11312	4.02	11370
Buckinghamshire	Ireland	5.09	94	3.58	95
	England & Wales	4.48	33221	4.10	33327
Caernavonshire	Ireland	4.88	155	4.19	156
	England & Wales	4.35	27781	3.88	27810
Cambridgeshire	Ireland	4.27	148	3.37	150
	England & Wales	4.39	41790	4.00	41894
Cardiganshire	Ireland	4.69	32	4.13	32
	England & Wales	4.20	22449	3.73	22467
Carmarthenshire	Ireland	4.14	130	3.86	132
	England & Wales	4.66	23254	4.20	23273
Cheshire	Ireland	4.92	2550	4.25	2560
	England & Wales	4.60	47104	4.14	47207
Cornwall	Ireland	4.65	447	4.19	459
	England & Wales	4.41	70211	4.05	70377
Cumberland	Ireland	5.27	4507	4.63	4519
	England & Wales	4.75	45975	4.25	46032
Denbighshire	Ireland	5.07	364	4.51	385
	England & Wales	4.57	23538	4.14	23822
Derbyshire	Ireland	5.14	1483	4.42	1496
	England & Wales	4.74	77649	4.33	77800
Devonshire	Ireland	4.35	1582	3.92	1637
	England & Wales	4.41	127940	3.92	128554
Dorset	Ireland	4.86	260	4.25	270
	England & Wales	4.44	39053	4.06	39141
Durham	Ireland	5.40	13710	4.83	13779
	England & Wales	4.86	158100	4.51	158275
Essex	Ireland	4.70	1394	4.51	1494
	England & Wales	4.61	110353	4.20	110976

Flintshire	Ireland	5.19	286	4.58	287
	England & Wales	4.51	9421	4.15	9434
Glamorganshire	Ireland	5.33	3843	4.56	3853
	England & Wales	4.98	95343	4.45	95527
Gloucestershire	Ireland	4.51	1642	3.81	1673
	England & Wales	4.53	107147	4.04	107577
Guernsey	Ireland	4.13	186	3.79	187
	England & Wales	4.26	6652	3.87	6660
Hampshire	Ireland	4.48	1941	4.19	2094
	England & Wales	4.53	114263	4.05	115134
Herefordshire	Ireland	4.49	166	3.63	168
	England & Wales	4.54	24735	3.96	24799
Hertfordshire	Ireland	4.49	142	3.55	142
	England & Wales	4.44	41644	4.13	41805
Huntingdonshire	Ireland	4.51	53	3.81	55
	England & Wales	4.32	11868	3.98	11895
Isle of Man	Ireland	4.10	558	3.67	559
	England & Wales	4.59	10425	4.16	10454
Jersey	Ireland	4.05	412	3.86	429
	England & Wales	4.22	9947	3.75	9995
Kent	Ireland	4.55	4475	4.21	4723
	England & Wales	4.71	187886	4.20	189608
Lancashire	Ireland	5.02	69134	4.34	69350
	England & Wales	4.84	616952	4.39	618065
Leicestershire	Ireland	4.83	531	4.24	557
	England & Wales	4.54	69169	4.13	69359
Lincolnshire	Ireland	4.29	604	3.79	618
	England & Wales	4.51	98025	3.98	98194
Merionethshire	Ireland	5.32	34	4.56	34
	England & Wales	4.55	14726	3.99	14741
Middlesex	Ireland	4.32	19661	3.72	19787
	England & Wales	4.59	551295	3.96	553047
Monmouthshire	Ireland	5.09	1780	4.42	1788
	England & Wales	4.84	44792	4.34	44864
Montgomeryshire	Ireland	5.00	52	4.06	52
	England & Wales	4.67	15884	4.06	15924
Norfolk	Ireland	4.40	335	3.73	337
	England & Wales	4.27	98606	3.99	98888
Northamptonshire	Ireland	4.51	262	4.24	279
	England & Wales	4.52	58803	4.13	59042
Northumberland	Ireland	4.93	4893	4.50	4927
	England & Wales	4.71	82837	4.35	83056
Nottinghamshire	Ireland	4.81	784	3.88	790
	England & Wales	4.62	91182	4.16	91314
Oxford	Ireland	4.70	134	3.69	137
	England & Wales	4.46	38714	4.03	38847
Pembrokeshire	Ireland	4.65	213	4.78	249
	England & Wales	4.50	17460	4.00	17594
Radnorshire	Ireland	3.81	16	3.71	17
	England & Wales	4.81	3760	4.11	3774
Rutland	Ireland	3.31	16	3.06	17
	England & Wales	4.45	4888	3.98	4910
Shropshire	Ireland	4.89	672	4.21	677
	England & Wales	4.68	53991	4.13	54129
Somerset	Ireland	4.36	644	3.41	649
	England & Wales	4.49	103715	4.02	103976
Staffordshire	Ireland	5.36	4826	4.64	4855
	England & Wales	4.98	188905	4.55	189401
Suffolk	Ireland	4.56	283	4.12	299
	England & Wales	4.37	77714	4.01	77997
Surrey	Ireland	4.57	7348	4.04	7437

	England & Wales	4.73	273647	4.16	274688
Sussex	Ireland	4.67	882	3.82	909
	England & Wales	4.75	95705	4.07	96122
Warwick	Ireland	4.93	3455	4.33	3476
	England & Wales	4.68	145697	4.24	146100
Westmorland	Ireland	4.54	112	4.02	113
	England & Wales	4.79	12857	4.22	12883
Wiltshire	Ireland	4.36	188	3.92	201
	England & Wales	4.41	53843	4.04	53982
Worcestershire	Ireland	5.09	688	4.44	706
	England & Wales	4.77	76465	4.26	76746
Yorkshire Esat	Ireland	4.75	1837	4.27	1861
	England & Wales	4.46	73555	3.97	73744
Yorkshire North	Ireland	5.64	2464	4.74	2471
	England & Wales	4.74	64787	4.21	64904
Yorkshire West	Ireland	5.12	15273	4.52	15379
	England & Wales	4.65	441567	4.31	442522
Average	Ireland	4.93	178446	4.31	178446
	England & Wales	4.65	5073936	4.20	5073936

Source: NAPP GB 1881 Datafile

Table 14 は州別に平均世帯規模と平均家族規模を出生地別に集計した表である。それにより平均世帯規模をみれば全体ではアイルランド出生者が4.93人、イングランド・ウェールズ出生者が4.65人で、それはアイルランド出生者が多くなっていることを明確に示している。それを州別でみれば58州のうちアイルランド出生者の世帯員数が多い州は36州で、それは62%に該当していることになる。

他方平均家族規模を全体的に見ればアイルランド出生者が4.31人で、イングランド・ウェールズ出生者が4.2人、それは少しアイルランド出生者が多いことを示す。そこでそれを州別に見ておくと58州のうちでアイルランド出生者がイングランド・ウェールズ出生者より家族規模が多い割合は30州で、51.7%に減少していることがわかる。アイルランド出生者の世帯規模が多い原因として子供数の多さと寄宿人、同居人の多さがあげられるのではないかと推察される。

そこで19歳以下の子供数を出生地別に示したのが Table 15 である。それにより平均子供

Table 15. Numbers of Children under 19 years old in England & Wales (1881)

Number of Children	Ireland	United Kingdom	Unknown	Total
0	24.4	28.0	33.5	28.0
1	18.4	19.4	18.1	19.3
2	16.4	15.8	14.9	15.8
3	13.8	12.8	11.9	12.8
4	10.7	9.5	8.7	9.6
5	7.6	6.7	6.0	6.7
6	4.7	4.1	3.7	4.1
7	2.5	2.3	1.9	2.3
8	1.1	1.0	0.9	1.0
9	0.4	0.4	0.4	0.4
Total	100.0	100.0	100.0	100.0
Avarage	2.3	2.1	1.9	2.1
N	180113	5089880	90155	5360148

Source: NAPP GB 1881 Datafile

数を見れば、アイルランド出生者では2.3人、イングランド・ウェールズ出生者では2.1人であり、そこにアイルランド移民における子供数の多さが明確に認められる。人数別にみれば、0人と1人はイングランド・ウェールズ出生者に多いものの、2人以上ではすべてアイルランド出生者の方が多いことがわかる。ただし、そこにはアイルランド出生者の世帯主の場合でもイギリスで生まれた子供がそこから除外されている可能性が大きいこと、また、イギリスでは15歳以上の子供がライフサイクル・サーヴァントとして他出することがある点を考慮したとしても、アイルランド人移民の出生率が高かったものと思われるのであり、それはカトリックの戒律と関係があるものと推察される。

他方世帯主の兄弟姉妹を示した Table 16 を見れば、アイルランド人移民の場合にはイングランド・ウェールズ出生者と比較すれば明らかに兄弟が少ないということが明確に認められるのである。つまりそれが移民家族の1つの一般的な特徴といえるのであり、兄弟姉妹の移民先がイギリスに限定されるのではなく、アメリカ、カナダである可能性も持つからである。そしてアイルランド人移民の家族にはイングランド・ウェールズでの出生者が除外されているので、もしそれらの子供を含めればアイルランド出生者の平均家族規模とイングランド・ウェールズ出生者の家族規模との差もさらに拡大するに違いないといえよう。

Table 16. Numbers of Siblings in England & Wales (1881, %)

Persons	Ireland	United Kingdom	Total (%)	N (households)
0	85.5	54.5	55.5	1438157
1	4.9	9.4	9.2	2387161
2	2.6	8.7	8.5	2200860
3	2.2	8.3	8.1	2106265
4	1.8	7.2	7.0	1824495
5	1.3	5.3	5.2	1337354
6	0.8	3.4	3.3	856057
7	0.4	1.7	1.7	436743
8	0.2	0.8	0.8	211067
9	0.3	0.6	0.6	153464
N (households)	547511	24896343	100.0	25894983

Source: NAPP GB 1881 Datafile

② イングランド・ウェールズにおける世帯構成

Table 17 は Hammel=Laslett による世帯分類によりアイルランド出生者とイギリス出生者を世帯単位で示したものであり、Table 18 はそれを個人単位で示したものである。まず Table 17 によれば、アイルランド出生者は単純家族世帯 (Simple family households) が73.8% で一番多く、拡大家族世帯 (Extended family households) が12.3%、1人住まいが7.6%、他方イギリス出生者は単純家族世帯が72.4%、拡大家族世帯が13.6%、1人住まいが7.8%であり、その分布にはあまり明らかな相違が見られない。したがってアイルランド出生者の家族はイギリス出生者と同じく基本的に単純家族世帯が支配的形態であるといつてよい。しかし、Table 18 には少し両者に相違が見られる。すなわち個人単位で世帯類型を見れば、ア

Table 17. Type of Household Head in England And Wales (1881, %)

Type of Household	Irish	English	Total
1. Solitaries	7.6	7.8	7.8
2. No family	2.8	3.8	3.7
3. Simple family households	73.8	72.4	72.4
4. Extended family households	12.3	13.6	13.5
5. Multiple family households	2.4	2.0	2.0
Others	1.0	0.5	0.5
Total	180113	5089877	5360144

Source: NAPP GB 1881 Datafile

Table 18. Type of Member of Household in England and Wales (1881, %)

Type of Household	Irish	English	Total
1. Solitaries	4.9	2.9	3.1
2. No family	2.8	2.6	2.6
3. Simple family households	65.1	72.9	72.5
4. Extended family households	14.2	15.7	15.6
5. Multiple family households	3.2	2.9	2.9
Others	9.9	2.8	3.3
Total	547355	24896174	25894609

Source: NAPP GB 1881 Datafile

アイルランド出生者では単純家族世帯がイギリス出生者より少なく、逆に1人住まいでは多いということが読み取れる。そしてアイルランド出生者ではその他が9.9%であり、それは施設居住者が多いことを意味している。この施設には救貧院 (work house)、病院、刑務所、学校、孤児院、海軍、陸軍などが含まれており、アイルランド出生者からそれらを除外して計算しなおすと、それは単純家族世帯が72.1%、拡大家族世帯が15.7%、1人住まいが5.4%、多核家族世帯 (Multiple family households) が3.4%をそれぞれ示し、単純家族世帯と拡大家族世帯ともにイギリス出生者と同じ割合を示すことになる。しかし、施設居住者の割合が多いということは、アイルランド人移民の持つ重要な特徴の1つであるとみなされてよく、それは彼らが家族編成から除外されていることを意味しているのである。

つぎに Hammel=Laslett による世帯分類の下位分類でアイルランド出生者とイギリス出生者を区分して示したのが Table 19, Table 20 である。Table 19 と Table 20 はあまり顕著な相違を認めることができない。そして単純家族世帯の3d. である子供のいる寡婦に4.7%の大きな差がみられるぐらいであるが、そこには、アイルランド人移民における世帯主の早い死亡が反映しているものとみられよう。ところが Table 21 の世帯における夫婦家族単位数をアイルランド出生者とイギリス出生者別に見ると相違が認められる。ここで世帯というのは「共同の住居をともにする人々」と定義されているが、それは世帯=家族を意味していないのである。

そこで Table 21 は世帯のなかで夫婦家族が何組含まれているのかを示したものである。それによるとイギリス出生者で夫婦家族が1組である割合が87.0%で多く、2組あるいは含

Table 19. Type of Household Head in England and Wales (1881, %)

Type of Household		Irish	English	Total
1. Solitaries	1 a	5.2	4.9	4.9
	1 b	2.4	2.9	2.9
2. No family	2 a	1.1	1.6	1.5
	2 b	1.7	2.2	2.2
	2 c	0.0	0.0	0.0
3. Simple family households	3 a	11.4	12.9	12.9
	3 b	46.6	49.0	48.8
	3 c	3.3	2.7	2.7
	3 d	12.2	7.5	7.7
	3 e	0.3	0.3	0.3
4. Extended family households	4 a	2.9	3.2	3.2
	4 b	5.5	6.6	6.5
	4 c	3.0	3.0	3.0
	4 d	0.9	0.8	0.8
5. Multiple family households	5 a	0.4	0.4	0.4
	5 b	1.8	1.4	1.4
	5 c	0.0	0.0	0.0
	5 d	0.2	0.2	0.2
	5 e	0.0	0.0	0.0
Other		1.0	0.5	0.5
Total		180113	5089877	5360144

Note: 1a: Widowed, 1b: Single or unknown marital status, 2a: Coresident siblings, 2b: Coresident relatives of other kinds, 3a: Married couples alone, 3b: Married couples with children, 3c: Widowers with children, 3d: Widows with children 4a: Extended upwards, 4b: Extended downwards, 4c: Extended laterally 4d: Combinations of 4a-4c, 5a: Secondary units up, 5b: Secondary units down 5c: Units all one level, 5d: Freeches, 5e: Other multiple families

Source: NAPP GB 1881 Datafile

Table 20. Type of Members of Households in England and Wales (1881, %)

Type of Household		Irish	English	Total
1. Solitaries	1a	3.1	1.7	1.8
	1b	1.8	1.2	1.3
2. No family	2a	1.2	1.1	1.1
	2b	1.6	1.5	1.5
	2c	0.0	0.0	0.0
3. Simple family households	3a	9.7	6.5	6.6
	3b	44.9	57.5	56.9
	3c	2.0	2.3	2.3
	3d	8.3	6.4	6.5
	3e	0.2	0.2	0.2
4. Extended family households	4a	3.8	4.0	3.9
	4b	5.5	7.1	7.1
	4c	3.8	3.6	3.6
	4d	1.1	1.0	1.0
5. Multiple family households	5a	0.8	0.6	0.6
	5b	1.9	2.0	2.0
	5c	0.1	0.0	0.0
	5d	0.3	0.3	0.3
	5e	0.1	0.0	0.0
Other		9.9	2.8	3.3
Total		547355	24896174	25894609

Note: Type of Household head is the same of Table 19

Source: NAPP GB 1881 Datafile

Table 21. Numbers of Family Units in the Household in England & Wales (1881, %)

Number of unit of family	Irish	England & Wales	Total
0	6.9	5.2	7.8
1	75.2	87.0	67.5
2	7.4	4.9	5.3
3	0.7	0.3	0.5
4	0.1	0.0	0.1
5	0.0	0.0	0.0
6	0.0	0.0	0.0
7	0.0	0.0	0.0
10	0.0	0.0	0.0
13	0.0	0.0	0.0
Unknown	9.7	2.6	3.1

Source: NAPP GB 1881 Datafile

まない場合がそれぞれ4.9%と5.2%であるのに対して、アイルランド出生者では1組の夫婦家族が75.2%と少なく2組の夫婦家族が7.4%、夫婦家族を含まない世帯が6.9%と多い分布を示していることはイギリス出生者のそれと大きな相違であるといえよう。

つまり Hammel=Laslett による世帯分類では両者は同じ分布を示しているように見えたが、アイルランド出生者の場合は移民家族の性格がそこに強く内包されているものとみられよう。すなわち移民者がアイルランド本国での血縁や地縁を媒介に集合し、1つの住居空間において家族を形成している傾向がそこにあるように見られるのではないか。またアイルランド出生者で1人住まいがイギリス出生者より少し多く分布していることも夫婦家族を含まない数字の差に反映されており、それもアイルランド移民のもつ特徴の1つではないかと思われるのである。

さらにアイルランド出生者とイギリス出生者の家族形成に反映されている続柄別世帯構成を示したのが Table 22 である。これは同居親族集団の世帯主に対する関係別構成と規模を

Table 22. Resident Relatives by Relationship to Household Head (1881),

Persons	Irish	English
Parents	3.1	2.1
Parents in law	3.1	1.7
Siblings	4.0	5.4
Siblings in law	1.7	2.0
Children in law	0.8	1.4
Nephew/Niece	1.5	5.0
Grandchildens	0.6	8.4
Other Relatives	1.4	1.3
Total of Kins	16.2	27.3
Visitors	3.8	4.8
Lodgers	24.2	11.5
Boarders	24.4	11.7
Servants	11.6	21.8

Source: NAPP GB 1881 Datafile

100世帯単位で示した値である。それによるとアイルランド出生者の世帯では16.2人、イギリス出生者の世帯では27.3人と10人の差がそこにあることにまず注目される。そして1851年におけるイギリスでの親族規模が32人であることがすでに R. Wall により明らかにされているが、1881年のイギリス出生者の親族規模はそれよりも減少していることがわかる。つまり1881年における家族は同居親族をあまり含まない単純家族世帯が多くなってきていることを示すものであると理解されよう。

そこでその内訳を見れば、アイルランド出生者の場合には父母、義理の父母が双系的性格を持ちながら、水平的拡大親族である兄弟姉妹が4人であるものの、下向的拡大親族であるオイ・メイ、孫が極めて少ない分布をそこに明確に認めることができる。それに対してイギリス出生者では上向世代である父母が少ないものの、水平的世代である兄弟姉妹、下向的親族であるオイ・メイと孫が多い分布をしていることに特徴をもつものといえる。しかし、アイルランド出生者とイギリス出生者とを比較をすれば、親族以外の寄宿人や間借り人が24.2人と24.4人であり、イギリスの11.5人と11.7人とそこに大差が明確に認められること、またサーヴァントに関してはイギリス出生者の場合の方がアイルランド出生者のそれよりも2倍以上多いという違いもある。それはイギリスにおけるライフサイクル・サーヴァントを反映したものともみてよい。このサーヴァントに関してアイルランド出生者は先述した就業構造でみたように本来アイルランド人移民は、サーヴァントへの就業機会が多くなる可能性を強くもっていたことも意味している。

Table 23 と Table 24 はアイルランド出生者の世帯類型とイングランド・ウェールズ出生者の世帯類型に世帯主コーホートをクロスしたものである。それらを比較すればアイルランド出生者の場合には世帯主が40～49歳層が一番多く、30.2%を占め30～39歳層（23.7%）と

Table 23. Type of Households by Irish Household Head Age in England & Wales (1881, %)

	0～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～	Total (%)	N
1. Solitaries	0.1	0.7	1.1	1.5	1.6	1.8	0.7	0.4	7.6	13702
2. No family	0.0	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.3	0.1	2.8	5024
3. Simple family households	0.0	6.8	18.8	24.3	14.7	7.2	1.7	0.3	73.7	132739
4. Extended family households	0.0	1.2	2.7	3.2	2.7	1.9	0.5	0.1	12.3	22137
5. Multiple family households	0.0	0.2	0.3	0.5	0.8	0.6	0.1	0.0	2.5	4532
Total (%)	0.1	9.4	23.7	30.2	20.4	12.1	3.4	0.7	100.0	
N (households)	228	16979	42711	54452	36657	21723	6140	1164		180054

Table 24. Type of Households by English Household Head Age in England & Wales (1881, %)

	0～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～	Total (%)	N
1. Solitaries	0.1	0.8	0.9	1.0	1.4	1.8	1.4	0.4	7.8	395064
2. No family	0.1	0.5	0.5	0.5	0.6	0.8	0.6	0.2	4.0	191437
3. Simple family households	0.1	12.3	20.1	17.7	12.4	7.0	2.4	0.4	72.4	3682643
4. Extended family households	0.0	1.7	2.9	2.7	2.7	2.4	1.0	0.2	13.6	690312
5. Multiple family households	0.0	0.2	0.3	0.3	0.5	0.5	0.2	0.0	2.0	102397
Total (%)	0.3	15.6	24.7	22.3	17.7	12.6	5.6	1.3	100.0	
N (households)	15569	791593	1258365	1132790	902483	639163	285474	62924		5088364

Source: NAPP GB 1881 Datafile

50～59歳層（20.4%）という山型を形成しているのに対して、イングランド・ウェールズ出生者では30～39歳層が一番多く24.7%を占め、以下40～49歳層（22.3%）、50～59歳（17.7%）に拡散した分布に大きな相違を認めることができる。つまり世帯主の年齢階層に関してアイルランド出生者の場合イングランド・ウェールズ出生者より1ランク年齢層が上昇していることを意味している。その原因としてアイルランド人移民における晩婚化が1つの要因とみなせるのではないだろうか。そして大飢饉時に移民したアイルランド出生者はこの時期60歳代以上であると思われるが、そこではすでに単純家族世帯を形成していたことも明らかであろう。

年齢コーホートと未婚・既婚のクロスをしてみれば、アイルランド出生者では20～29歳層の未婚率が24.3%であるに対して、イングランド・ウェールズ出生者では22.2%、30～39歳層では25.6%と18.9%とさらに差が拡大していることから判断しても晩婚かシングル志向かの傾向を指摘することができるのである。しかしその年齢層の特徴を世帯類型と関係づければ、両者ともにその特徴を反映した世帯分布が認められるのであるが、直接世帯主年齢と世帯類型と相関しているとはいえないようである。

したがって以上のようなアイルランド出生者は移民による親族の下向化（特に孫の親族への包含）の限界性、つまり世代深度の浅さ、親族の上向世代親族との同居の維持という状況的要素に強く規定されており、アイルランドの移民の家族形態自体がイギリスのそれよりもスリムであるとみなされてよいのではなかろうか。さらに移民の一般的傾向と同じくアイルランド人移民の場合にも新しいアイルランドからの移住者は血縁や地縁をたよりに移住先を決定する傾向にあると思われるのであり、それゆえ寄宿人、間借り人が世帯編成に加入してくる可能性も高くなるものと考えられる。そのような都市部に集中したアイルランド人移民はどのような職業に従事していたのかという問題がつぎに検討されねばならない。

7. イングランド・ウェールズにおける就業構造

Table 25 はイングランド・ウェールズにおける職業の中分類により世帯主の職業を示したものである。それによるとアイルランド出生者は一般労働者が一番多く14.4%を占め、以下2%以上の職種を挙げれば、製鉄業、家内サーヴァント、炭鉱夫、綿工業、煉瓦工、港湾・ドック労働者などの雇用労働に集中しているのに対して、イングランド・ウェールズ出生者の場合には農民と農業労働者に集中がみられるが、それ以外に炭鉱夫、一般労働者が見られ、全体的職種に分散傾向があるのが特徴といえよう。

Table 26 は小分類により世帯主職業（414の職業分類）〔Kevin Schürer and Matthew Wollard, 2002〕、をアイルランド出生者とイギリス出生者に区分し、イギリス全体の職業とアイルランド出生者の職業が0.1%以上である職業を抽出したものである。それらの職業97種類のうちアイルランド出生者がイングランド・ウェールズ出生者より割合の多い職種は39であり、それは40%に相当し、逆の場合が51種類で47%を占め、同じ割合が7種類であり、

Table 25. The Percentage of Occupations of Household Heads (1881, %)

Code	Occupation	Ireland	United Kingdom	Unknown	Total
1	General/Local Government	2.1	1.4	1.5	73719
2	Defence of the country	2.4	0.6	2.4	35711
3	Professionals	3.0	2.9	8.4	155129
4	Domestic Service Offices	7.6	5.3	4.5	272683
5	Commercial Occupation	2.0	2.7	7.8	142608
6	Conveyance of men,goods and messages	7.5	6.4	6.1	328265
7	Agriculture	3.7	15.4	4.7	758164
8	Animals	0.4	1.2	0.7	57951
9	Books, Print and Maps	0.6	0.9	0.9	44442
10	Dealers in Machines and Implements	1.3	2.9	3.4	143853
11	Workers and Dealers in Houses,Furniture and Decorations	8.1	9.0	6.8	459405
12	Workers and Dealers in Carriages and Harnesses	0.4	1.0	0.5	50532
13	Workers and Dealers in Ship and Boats	1.2	0.7	0.8	36443
14	Workers and Dealers in Chemicals and Compounds	1.5	0.4	0.5	23628
15	Workers and Dealers in Tabacco and Pipes	0.1	0.2	1.1	9292
16	Workers and Dealers in Food and Lodging	4.6	8.2	9.4	413063
17	Workers and Dealers in Textiles Fabrics	5.6	5.3	2.4	266993
18	Workers and Dealers in Dress	7.3	6.2	11.5	324858
19	Workers and Dealers in Various Animal Substances	0.7	0.7	1.3	34395
20	Workers and Dealers in Various Vegetable Substance	1.5	1.7	1.4	86473
21	Workers and Dealers in Various Mineral Substances	14.2	13.4	7.9	684167
22	Workers and Dealers in General or Unspecified Commodities	19.6	8.3	7.3	443474
23	Workers and Dealers in Refuse Matters	0.4	0.2	0.2	8935
24	Persons without Specified Occupations	4.2	5.1	8.6	260245
	Total	167430	4864961	82037	5114428

Source: NAPP GB 1881 Datafile

全体的にはイングランド・ウェールズ出生者は職種が多いという特徴がそこに認められる。つまりそこにアイルランド人移民の職業的集中性を強く示しているものと判断されるのである。

そこで職種内容にたちってみると、アイルランド出生者で一番多い職業は一般労働者の14.4%であるが、その職種内容が特定化されていないことに注目されるべきである。つまりその多くは日雇い労働者を意味しており、当時彼らが大都市の基幹労働部門の土台を形成していたのである〔本多三郎, 1981, 66〕。それはイギリス全体の割合である5.2%と比較しても2.8倍高くなっていることから判断できよう。それ以外で2%以上の職業を挙げるならば、それは製鉄業(4.0%)、炭鉱夫(3.0%)、港・ドック・波止場・灯台サービス労働者(2.8%)、テーラー(2.8%)、家内サーヴァント(2.8%)、農業労働者(2.6%)、レンガ職人(2.6%)、木綿・木綿製品製造(2.5%)、靴屋(2.2%)という順序を示しており、それらの職業により全体の40%が占められていることは注目されてよい。

Table 26. Occupations of Household Heads in England & Wales(1881, %)

Code	Occupation	Irish	English	Total
2	Civil Service (officers and Clerks)	0.7	0.3	0.4
5	Police	0.8	0.5	0.5
9	Army Officer (effective/retired)	0.5	0.1	0.1
10	Soldier and Non-commissioned officer	0.8	0.1	0.2

11	Milita, Yeomanry, Volunteers	0.3	0.0	0.1
12	Army Pensioner	0.7	0.1	0.1
14	Seaman, R. N.	0.3	0.1	0.1
17	Clergymen (Established Church)	0.6	0.3	0.3
27	Physician, Surgen, General Practitioner	0.5	0.2	0.2
32	Schoolmaster	0.3	0.6	0.6
54	Domestic Coachman, Groom	0.3	0.6	0.5
55	Domestic Gardener	0.3	0.6	0.5
56	Domestic Indoor Servant	2.8	1.4	1.4
63	Charwomen	1.7	0.9	0.9
64	Washing and Bathing Service	1.7	1.3	1.3
67	Broker, Agent, Factor	0.3	0.3	0.3
71	Commercial Traveller	0.3	0.4	0.4
72	Commercial Clerk	0.7	1.1	1.1
78	Railway Engine Driver, Stoker	0.1	0.3	0.3
81	Other Railway Officials and Servant	0.7	1.0	1.0
84	Cabman, Flyman, Coachman (not domestic)	0.3	0.6	0.6
85	Carman, Carrier, Carter, Haulier	0.7	1.5	1.4
89	Bargeman, Lighterman, Waterman	0.1	0.3	0.3
91	Seaman (Merchant Service)	0.8	0.6	0.7
95	Harbour, Dock, Wharf, Lighthouse Service	2.8	0.4	0.4
96	Warehouseman (not Manchester)	0.3	0.3	0.3
98	Messenger, Porter, Watchman	0.9	0.5	0.5
100	Farmer, Grazier	0.2	4.6	4.4
102	Farmer, Bailiff	0.0	0.3	0.3
103	Agricultural Labourer, Farm Servant, Cottager	2.6	7.9	7.6
104	Shepherd	0.0	0.3	0.3
112	Gardener (not domestic)	0.5	1.2	1.2
114	Groom, House-keeper, Horse-breaker	0.3	0.4	0.4
126	Printer	0.3	0.5	0.5
133	Engine, Machine Maker	0.2	0.4	0.4
135	Fitter, Turner (Engine and Machine)	0.2	0.6	0.6
136	Boiler Maker	0.3	0.3	0.3
151	Watch maker, Clock Maker	0.1	0.2	0.3
167	Builder	0.2	0.5	0.5
168	Carpenter, Joiner	0.9	2.7	2.6
169	Bricklayer	2.6	1.3	1.4
170	Mason	1.6	1.1	1.1
172	Plasterer, Whitewasher	0.6	0.3	0.3
174	Plumber	0.1	0.4	0.4
175	Painter, Glazier	0.7	1.1	1.1
177	Cabinet Maker	0.4	0.6	0.6
192	Coachmaker	0.2	0.3	0.3
194	Wheelwright	0.0	0.3	0.3
198	Ship, Boat, Barge Builder	0.8	0.3	0.3
199	Shipwright, Ship Carpenter (ashore)	0.2	0.3	0.3
208	Manufacturing Chemist	1.0	0.1	0.1
214	Innkeeper, Hotel Keeper, Publican	0.5	1.4	1.3
215	Lodging, Boarding House Keeper	0.9	0.5	0.6
219	Brewer	0.1	0.3	0.3
220	Beerseller, Ale, Porter, Cider Dealer	0.2	0.3	0.3
223	Milkseller, Dairyman	0.1	0.3	0.3
225	Butcher, Meat Salesman	0.1	0.9	0.9
226	Provision Curer, Dealer	0.4	0.2	0.2
231	Baker	0.2	0.7	0.7
233	Greengrocer, Fruiterer	0.4	0.4	0.4
236	Grocer, Tea, Coffee, Chocolate Maker, Dealer	0.6	1.5	1.4

240	Woolen Cloth Manufacture	0.4	0.6	0.6
242	Worsted, Stuff, Manufacture	0.3	0.3	0.3
248	Silk, Silk Goods, Manufacture	0.1	0.3	0.3
253	Cotton, Cotton Goods Manufacture	2.5	1.7	1.7
256	Flax, Linen-Manufacture, Dealer	0.3	0.1	0.1
270	Dyer, Printer, Scourer, Bleacher, Calenderer (undefined)	0.3	0.2	0.2
275	Draper, Linen Draper, Mercer	0.2	0.5	0.5
282	Tailor	2.8	1.3	1.4
283	Milliner, Dressmaker, Staymaker	0.7	1.0	1.0
285	Shirt Maker, Seamstress	0.4	0.4	0.4
286	Hosiery Manufacture	0.0	0.3	0.3
290	Shoe, Boot-Maker, Dealer	2.4	2.2	2.2
322	Sawyer	0.1	0.3	0.3
325	Cooper, Hoop Maker, Bender	0.3	0.2	0.2
328	Paper Manufacture	0.3	0.1	0.1
336	Coal Miner	3.0	3.7	3.7
337	Ironstone Miner	0.7	0.3	0.3
344	Coal Marchant	0.2	0.3	0.3
345	Coalheaver	0.3	0.2	0.2
346	Coke, Charcoal, Peat-Cutter, Burner, Dealer	0.4	0.1	0.1
347	Gas Works Service	0.5	0.2	0.3
348	Stone Quarrier	0.3	0.4	0.4
357	Brick, Tile-Maker, Burner, Dealer	0.5	0.5	0.5
360	Road Labourer	0.3	0.2	0.2
362	Platelayer	0.1	0.3	0.3
363	Railway Labourer, Navvy	0.4	0.4	0.4
365	Earthenware, China, Porcelain, Manufacture	0.1	0.3	0.3
375	Iron Manufacture	4.0	1.7	1.8
377	Blacksmith	0.5	1.3	1.2
386	Tin, Tin Plate, Tin Goods-Manufacturer, Worker	0.2	0.3	0.3
399	General Shopkeeper, Dealer	0.8	0.6	0.6
401	Costermonger, Huckster, Street Seller	1.8	0.3	0.4
404	General Labourer	14.4	5.2	5.5
405	Engine Driver, Stoker, Fireman (not railway,marine)	0.6	0.9	0.9
405	Artizan, Mechanic (undefined)	0.2	0.4	0.4
408	Factory Labourer (undefined)	0.3	0.2	0.2
414	Person returned by Property, Rank & c.and not	3.9	4.8	4.9
	N (Persons)	180113	5089869	5360137

Note: Over 0.1 % of all Occupation and Irish Occupation of Household Head
Source: NAPP, GB 1881 Datafile

それらをイングランド・ウェールズ出生者と比較してみると、イングランド・ウェールズ出生者では農業労働者が一番多く、7.9%であり、一般労働者(5.2)、農民・畜産業(4.6%)、炭鉱夫(3.7%)、大工(2.7%)、靴屋(2.2%)という順序をしめし、それらにより26%を占めるにすぎない。つまりアイルランド出生者の場合には、農業や農業労働者・農場サーヴァントの職業が極めて低く、アイルランド人移民が都市部に居住することとも関連して、アイルランド人移民の職業は工業の未熟練・非熟練労働者が中核を占めながらも、そこには職業の多様性も認められるが、どちらかといえば特定の職種に集中性を強く持つのに対して、イングランド・ウェールズ出生者では農業などの第1次産業を中心に、工業、商業という多様な就業構造が明らかに認められるのである。そこに移民と移民受け入れ国における就業構造のコントラストが明らかに顕現しているといえる。

ところでそのような世帯主のもつ就業構造に対して家族員である息子、配偶者、娘は家族でどのような就業形態をとり家族役割をそれぞれ遂行しているのであろうか。すなわち家族のなかで稼ぎ手の中核である世帯主以外の家族員はどのような形態で家族収入を最大化するような家族戦略をとっていたのであろうか。特に移民家族の場合には家族全員が就業することにより家族生活の満足度を高めうる家族戦略をとるのではないかという仮説をもつからである。そのような視点から息子、配偶者、娘の就業構造をつぎに検討しておこう。

まず Table 27 は、息子の就業状況を示したものである。それによると0.1%以上の息子の職種は全体で70種類みられ、それは世帯主の種類72%を占めることになる。アイルランド出生者の息子とイングランド・ウェールズ出生者の息子とを比較すれば、アイルランド出生者が優位な職種は25種類、イングランド・ウェールズ出生者が優位な職種が39種類であり、同じ割合の職種が6種類である。そこからイングランド・ウェールズ出生者が職種においてアイルランド出生者より拡散していることが読み取れるし、逆にいえばアイルランド出生者は職種の限定的性格を強く持つといえる。

Table 27. Occupations of Sons in England & Wales (1881, %)

Code	Occupation	Irish	English	Total
2	Civil Service (officers and Clerks)	0.4	0.2	0.2
3	Civil Service (officers and Clerks)	0.5	0.4	0.4
10	Soldier and Non-commissioned officer	0.6	0.1	0.1
26	Law Clerk, and others connected with the law	0.3	0.6	0.6
32	Schoolmaster	0.5	0.8	0.8
54	Domestic Coachman, Groom	0.1	0.3	0.3
55	Domestic Gardener	0.2	0.4	0.4
56	Domestic Indoor Servant	0.3	0.5	0.5
58	Inn, Hotel Servant	0.3	0.3	0.3
72	Commercial Clerk	3.5	3.9	4.0
81	Other Railway Officials and Servant	1.1	1.2	1.2
84	Cabman, Flyman, Coachman (not domestic)	0.3	0.3	0.3
85	Carman, Carrier, Carter, Haulier	1.2	1.3	1.3
91	Seaman (Merchant Service)	1.1	0.5	0.5
95	Harbour, Dock, Wharf, Lighthouse Service	2.0	0.3	0.3
96	Warehouseman (not Manchester)	0.3	0.1	0.1
98	Messenger, Porter, Watchman	3.4	3.9	3.9
100	Farmer, Grazier	0.0	0.3	0.3
101	Farmer's Grazier's-Son, Grandson, Brother, Nephew	0.1	4.4	4.3
103	Agricultural Labourer, Farm Servant, Cottager	2.1	10.9	10.8
112	Gardener (not domestic)	0.2	0.8	0.8
114	Groom, House-keeper, Horse-breaker	0.3	0.5	0.5
121	Fisherman	0.0	0.3	0.3
126	Printer	0.9	1.3	1.3
135	Fitter, Turner (Engine and Machine)	0.7	0.9	0.9
136	Boiler Maker	0.5	0.3	0.3
137	Spinning and Weaving Machine Maker	0.3	0.3	0.3
151	Watch maker, Clock Maker	0.1	0.3	0.3
168	Carpenter, Joiner	1.4	3.1	3.1
169	Bricklayer	2.1	1.4	1.4
170	Mason	1.5	1.2	1.2
172	Plasterer, Whitewasher	0.6	0.3	0.3
174	Plumber	0.5	0.7	0.7

175	Painter, Glazier	1.0	1.2	1.2
177	Cabinet Maker	0.5	0.7	0.7
192	Coachmaker	0.3	0.3	0.3
194	Wheelwright	0.1	0.4	0.3
197	Saddler, Harness Whip Maker	0.2	0.3	0.3
198	Ship, Boat, Barge Builder	1.4	0.3	0.3
208	Manufacturing Chemist	1.0	0.1	0.1
225	Butcher, Meat Salesman	0.3	0.9	0.9
231	Baker	0.5	0.7	0.7
236	Grocer, Tea, Coffee, Chocolate Maker, Dealer	0.6	1.1	1.1
240	Woolen Cloth Manufacture	0.7	1.0	1.0
242	Worsted, Stuff, Manufacture	0.8	0.9	0.9
253	Cotton, Cotton Goods Manufacture	6.7	4.1	4.1
254	Cotton, Calico-Printer, Dyer, Bleacher	0.5	0.3	0.3
270	Dyer, Printer, Scourer, Bleacher, Calenderer (undefined)	0.9	0.3	0.4
275	Draper, Linen Draper, Mercer	0.3	0.5	0.5
282	Tailor	1.4	1.0	1.0
290	Shoe, Boot-Maker, Dealer	1.6	1.9	1.9
325	Cooper, Hoop Maker, Bender	0.5	0.2	0.2
336	Coal Miner	5.9	6.2	6.2
337	Ironstone Miner	1.8	0.3	0.3
348	Stone Quarrier	0.3	0.5	0.5
357	Brick, Tile-Maker, Burner, Dealer	0.7	0.7	0.7
363	Railway Labourer, Navvy	0.3	0.3	0.3
365	Earthenware, China, Porcelain, Manufacture	0.3	0.5	0.5
366	Glass Manufacture	0.7	0.4	0.4
371	Goldsmith, Silversmith, Jeweller	0.1	0.3	0.3
375	Iron Manufacture	6.6	2.4	2.5
377	Blacksmith	0.8	1.5	1.4
386	Tin, Tin Plate, Tin Goods-Manufacturer, Worker	0.3	0.6	0.6
390	Brass, Bronze Manufacture.Brazier	0.3	0.5	0.5
399	General Shopkeeper, Dealer	0.3	0.5	0.5
401	Costermonger, Huckster, Street Seller	0.5	0.2	0.2
404	General Labourer	15.3	6.4	6.5
405	Engine Driver, Stoker, Fireman (not railway, marine)	0.7	0.6	0.6
406	Artizan, Mechanic (undefined)	0.7	0.9	0.9
408	Factory Labourer (undefined)	0.7	0.5	0.5
	Total	17519	1806699	1838485

Note: Over 0.1% of all Occupation and Irish Occupation of Sons

Source: NAPP, GB 1881 Datafile

そこで職種の内容に立ち入ってみておくと、アイルランド出生者で一番多い割合の職種は一般労働者で、それは15.3%を占め、それはイングランド・ウェールズ出生者の2.4倍であることを示している。以下2%以上の職種を挙げておけば、木綿・木綿製品製造(6.7%)、製鉄業労働者(6.6%)、炭鉱夫(5.9%)、事務員(3.5%)、メッセンジャー・ポーター・夜警(3.4%)、農業労働者(2.1%)、煉瓦工(2.1%)、港・ドック・波止場・灯台サービス労働者(2.0%)という順序になっている。他方イングランド・ウェールズ出生者の息子の場合、農業労働者が一番多く10.9%を占めているが、それ以外では一般労働者(6.4%)、炭鉱夫(6.2%)、農民(4.4%)、事務員(3.9%)、メッセンジャー・ポーター・夜警(3.9%)、大工(3.1%)という順序を示している。

したがってアイルランド出生者の息子は父親の職業(一般労働者)を継承しながら、すこ

し異種の職種に拡大して就業している傾向を読み取ることができた。しかしアイルランド人移民の男性の職業は未熟練・非熟練労働者が依然中核を占めながら、それ以外は雑業層といわれるインフォーマルセクターに従事していることに顕著な特徴を認めることができたのである。他方イングランド・ウェールズ出生者の場合には農業労働者、農民という第1次産業と雇用労働に二極化しながら職業の多様化がみとめられたのであり、農民や農業労働者は父親の継承者としての役割を持つ可能性が強いように思われる。

つぎに Table 28 は配偶者の就業状況を示したものである。それを見れば、0.1%以上の職

Table 28. Occupations of Spouses in England & Wales (1881, %)

Code	Occupation	Irish	English	Total
31	Subordinate Medical Service	0.3	0.6	0.6
32	Schoolmaster	0.5	1.4	1.4
56	Domestic Indoor Servant	17.9	10.1	10.4
62	Charwomen	4.5	3.4	3.4
63	Washing and Bathing Service	10.9	11.7	11.6
103	Agricultural Labourer, Farm Servant, Cottager	1.8	2.1	2.1
125	Bookbinder	0.3	0.3	0.3
177	Cabinet Maker	0.2	0.4	0.4
214	Innkeeper, Hotel Keeper, Publican	0.1	0.3	0.3
215	Lodging, Boarding House Keeper	1.3	0.6	0.6
232	Confectioner, Pastrycook	0.3	0.4	0.4
233	Greengrocer, Fruiterer	0.5	0.3	0.3
236	Grocer, Tea, Coffee, Chocolate Maker, Dealer	0.2	0.8	0.8
240	Woolen Cloth Manufacture	1.9	2.1	2.1
242	Worsted, Stuff, Manufacture	2.5	1.8	1.8
248	Silk, Silk Goods, Manufacture	1.0	2.2	2.2
253	Cotton, Cotton Goods Manufacture	16.7	12.4	12.5
256	Flax, Linen-Manufacture, Dealer	1.4	0.2	0.2
257	Lace Manufacturer, Dealer	0.2	3.0	2.8
269	Weaver (undefined)	0.5	0.6	0.6
271	Factory Hand (textile, undefined)	1.0	0.4	0.5
275	Draper, Linen Draper, Mercer	0.1	0.3	0.3
280	Hatter, Hat Manufacture	0.4	0.5	0.5
281	Straw-Hat, Bonnet, Plait Manufacture	0.1	3.2	3.0
282	Tailor	4.9	2.8	2.9
283	Milliner, Dressmaker, Staymaker	7.5	13.2	13.0
285	Shirt Maker, Seamstress	1.9	2.5	2.5
286	Hosiery, Manufacture	0.2	1.3	1.2
288	Glover, Glove Maker	0.0	1.1	1.1
290	Shoe, Boot-Maker, Dealer	1.0	2.0	1.9
328	Paper Manufacture	1.6	0.3	0.4
333	Paper Box, Paper Bag Maker	0.2	0.4	0.4
365	Earthenware, China, Porcelain, Manufacture	0.2	0.9	0.9
379	Nail Manufacture	0.0	0.9	0.8
399	General Shopkeeper, Dealer	1.2	1.2	1.2
401	Costermonger, Huckster, Street Seller	3.8	0.8	0.9
404	General Labourer	0.9	0.4	0.4
408	Factory Labourer (undefined)	0.8	0.2	0.2
409	Machinist, Machine Worker (undefined)	0.6	0.7	0.7
	Total	19538	463033	488061

Note: Over 0.1% of all Occupation and Irish Occupation of Spouses

Source: NAPP, GB 1881 Datafile

種は39種類あり、アイルランド出生者が優位な職種は14種類、イングランド・ウェールズ出生者が優位な職種は23種類、同じ割合の職種が2種類であることを示している。したがってイングランド・ウェールズ出生者の方が職種において多様性を持つが、アイルランド出生者の場合には集中性をもつものと判断してよいだろう。

そこでアイルランド出生者の配偶者で一番割合の多い職種は家内サーヴァントであり、それは17.9%を占める。以下木綿・木綿製品製造（16.7%）、洗濯・バスサービス（10.9%）ドレスメーカー・コルセット製造（7.5%）、服屋（4.9%）、行商人（3.8%）という順序を示し、それらはサービス業や雑業層であるインフォーマルセクターに属するものが多いといえよう。

他方イングランド・ウェールズ出生者では一番多い割合の職種はドレスメーカー・コルセット製造（13.2%）であり、以下木綿・木綿製品製造（12.4%）、洗濯・バスサービス（11.7%）、家内サーヴァント（10.1%）であり、それらはほぼアイルランド出生者と同じ傾向を示すものとみてよい。しかし配偶者の就業率を見れば、それはアイルランド出生者が16.9%、イングランド・ウェールズ出生者が12.2%であり、そこに少し相違が存在することに注目しておきたい。つまりそれはアイルランド出生者の方が収入獲得的役割をイングランド・ウェールズ出生者より強いことを示すものと判断したい。

最後に娘の就業状況を示したのが Table 29 である。それを配偶者と比較すれば、娘の職種は42種類あり、配偶者の39種類とほとんどそこに相違がない。娘の職種をアイルランド出生者とイングランド・ウェールズ出生者とで比較すれば、アイルランド出生者が優位な職種数は16、イングランド・ウェールズ出生者が25であり、イングランド・ウェールズ出生者における職種の多様性が配偶者と同様に認めることができる。

Table 29. Occupation of Daughters in England & Wales (1881, %)

Code	Occupation	Irish	English	Total
32	Schoolmaster	1.2	0.8	0.8
33	Teacher, Professor, Lecturer	0.6	0.7	0.7
47	Musician, Music Master	0.3	0.5	0.5
56	Domestic Indoor Servant	14.5	18.5	18.4
58	Inn, Hotel Servant	0.5	0.8	0.8
62	Charwomen	1.2	0.7	0.7
63	Washing and Bathing Service	2.2	2.8	2.7
72	Commercial Clerk	0.2	0.3	0.3
103	Agricultural Labourer, Farm Servant, Cottager	1.0	1.1	1.1
125	Bookbinder	0.7	0.6	0.6
177	Cabinet Maker	0.2	0.3	0.3
212	Tabacco Manufacture, Tabacconist	0.8	0.4	0.4
232	Confectioner, Pastrycook	0.3	0.4	0.4
236	Grocer, Tea, Coffee, Chocolate Maker, Dealer	0.1	0.5	0.5
240	Woolen Cloth Manufacture	2.2	2.8	2.8
242	Worsted, Stuff, Manufacture	4.1	3.7	3.7
248	Silk, Silk Goods, Manufacture	1.0	1.7	1.7
253	Cotton, Cotton Goods Manufacture	24.7	15.2	15.3
256	Flax, Linen-Manufacture, Dealer	2.7	0.4	0.4

257	Lace Manufacturer, Dealer	0.2	1.3	1.3
262	Hemp, Jute, Cocoa Fibre Manufacture	0.9	0.1	0.1
269	Weaver (undefined)	0.6	0.6	0.6
271	Factory Hand (textile, undefined)	1.6	0.7	0.7
275	Draper, Linen Draper, Mercer	0.5	0.9	0.9
280	Hatter, Hat Manufacture	0.6	0.5	0.5
281	Straw-Hat, Bonnet, Plait Manufacture	0.0	1.3	1.2
282	Tailor	2.8	1.9	1.9
283	Milliner, Dressmaker, Staymaker	11.4	16.3	16.3
285	Shirt Maker, Seamstress	1.9	1.8	1.8
286	Hosiery, Manufacture	0.2	0.7	0.7
288	Glover, Glove Maker	0.0	0.4	0.4
290	Shoe, Boot-Maker, Dealer	0.7	1.5	1.5
328	Paper Manufacture	1.4	0.5	0.5
333	Paper Box, Paper Bag Maker	0.4	0.5	0.5
365	Earthenware, China, Porcelain, Manufacture	0.6	0.9	0.8
379	Nail Manufacture	0.0	0.3	0.3
386	Tin, TinPlate, Tin Goods-Manufacture, Worker, Dealer	0.2	0.4	0.4
399	General Shopkeeper, Dealer	0.7	0.8	0.8
401	Costermonger, Huckster, Street Seller	1.0	0.2	0.2
406	Artizan, Mechanic (undefined)	0.3	0.5	0.5
408	Factory Labourer (undefined)	1.8	0.8	0.8
409	Machinist, Machine Worker (undefined)	1.4	1.1	1.1
	Total	12414	1009895	1030461

Note: Over 0.1% of all Occupation and Irish Occupation of Daughters

Source: NAPP, GB 1881 Datafile

そこで職種の内容に立ち入ってみれば、アイルランド出生者の場合に一番多い割合の職種は、木綿・木綿製品製造が一番多く、24.7%を占め、以下家内サーヴァント（14.5%）、ドレスメーカー・コルセット製造（11.4%）に集中していることが明確に認められる。他方イングランド・ウェールズ出生者では家内サーヴァントが一番多く18.5%を占め、以下ドレスメーカー・コルセット製造（16.3%）、木綿・木綿製品製造（15.2%）に集中した分布を認められる。ところが娘の就業率を見れば、アイルランド出生者が38.8%、イングランド・ウェールズ出生者が18.2%であり、その大きな違いを読み取ることができる。また、娘の職種は配偶者（母親）よりも職種の集中化が顕著であることも明らかに認められた。さらにイングランド・ウェールズ出生者の家内サーヴァントの多さはライフサイクル・サーヴァントの性格を残存させているものと判断されよう。

以上においてイングランド・ウェールズにおける家族員の就業状況を世帯主、息子、配偶者、娘の順序で分析してきた。そこからアイルランド人移民の家族は単純家族世帯を編成原理とし、就業構造に関しては世帯主が一般的労働者を中核に多種類の職種に就業するという性格を持ちながら、それを家族の稼ぎ手の中核とし、それに補助的役割をもつ息子という父親—息子ラインと、そのラインに補助的役割をもつ配偶者—娘ラインという家族役割配置がそこに明確に認められたのである。また同じアイルランドの地域の同郷人やアイデンティティをもつ人々を世帯に間借り人や寄宿人として組み入れることが家族戦略と考えられていたのである。

他方イングランド・ウェールズの家族も同じく単純家族世帯を編成原理としながら、家業的性格を持つ農業と雇用労働に分化させ、どちらかといえば父—息子ラインが支配的な家族役割配置、配偶者（母）—娘が補助的役割を遂行するという構造を持っていたように思われる。そこにアイルランド移民とネイティブなイングランド・ウェールズの家族戦略のトーンに若干の違いが認められるのではないだろうか。また一般的に19世紀中頃のヴィクトリア時代の家族は、家父長的性格が強く維持されていたといわれているが、このデータはそれを裏づけるものとみられよう。

4. むすびにかえて

以上において筆者はアイルランド人の移民研究、アイルランド人移民家族の理論的検討、イングランド・ウェールズにおける家族構造を検討してきた。それらをここで要約し、今後残された問題点を指摘することによりむすびにかえたいと思う。

まず筆者はアイルランドの家族構造研究において1821年、1841年、1851年の残存しているセンサス個票と1901年と1911年の3教区のセンサス個票をデータにしてアイルランドの支配的家族形態が19世紀中ごろまで分割相続に基づく単純家族世帯であったが、19世紀中ごろ以降持参金制度にもとづく縁組婚システムと不分割相続システムの浸透により直系家族を含む大家族世帯、多核家族世帯へ変化したことを検証した。そしてアイルランドにとって最悪である1845年のじゃがいもの胴枯れ病による大飢饉により移民の増加が顕現してくるが、それは直系家族システムの形成と強い関連性があったのである。すなわち、家業である農家の継承者は原則的に1人の男子（長男の傾向が強い）が耕作地の保有を継承していくが、それ以外の男子は家に残留するか、他出して就業しなければならなかったのである。それも移民へのプッシュ要因であったといえよう。そしてアイルランド人の移民は当初土地なしの最底辺層ではなく、レンスター、マンスター、アルスターのどちらかといえば中・下層階級である労働者層が中心であった。そして貧困地方であるコノートの最貧困層はイングランドのリヴァプールやロンドンへ集中的に移住していく傾向にあったが、エンゲルスの記述〔エンゲルス、1990、182-4〕にもあるようにそこでも貧困な生活を余儀なくされたのである。さらに余裕がある階層やイギリスで余裕のできた階層の人々がアメリカへ再移住する可能性、つまり再帰性を強くもっていたのである。つまり最終的にアイルランド人移民はアメリカへの移民が各地方において一番多く、イギリスよりも移民先として優位な国であったのである。

ところでそのようなアイルランド人の移民が移民先でどのような家族を形成していったのかという研究はこれまで移民元の家族との関連性において検証されてこなかったのである。そしてそれらを明らかにする事例的研究はあったものの、数量的にイギリス、アメリカを全体的に追究した研究は皆無であった。

ところが筆者にはミネソタ人口センターのNAPPプロジェクトにおけるイングランド・ウェールズ、アメリカのデータベースにより、その問題を検討することが可能になったので

ある。

そしてアイルランド人移民の家族とネイティブの家族との比較をとおして本稿ではイングランド・ウェールズの家族、前稿ではスコットランドの家族、次稿ではアメリカの家族におけるそれぞれの家族構造を明らかにすることが筆者の最終目標なのである。

まずイングランド・ウェールズとスコットランドにおける家族に関しては、基本的にケンブリッジグループが結論づけたように単純家族世帯が支配的家族形態であることが確認された。アイルランド人移民にはリヴァプール、ロンドン、グラスゴーという都市部に居住の集中性が顕著に認められた。そして、アイルランド人移民はホスト国の家族に融合しようとする方向性が顕著にみられ、出生率が移住元のアイルランドにおける農村や都市より低いもののホスト国より高く、その結果世帯規模の大きい家族が形成されたことが特徴といえる。したがって、そのようなところにアイルランド人のアイデンティティや家族に関する伝統的価値観が発現されているものとみられる。

また家族と就業構造に関してはどちらも世帯主が稼ぎ手の役割をもつものの、アイルランド人移民の場合には未熟練・非熟練労働者に属する不特定の労働者に就業する可能性が高いが、それは移民以前の職業を強く反映しているものとみられてよい。そのような世帯主の就業に対して、それ以外の家族員は総就業化により収入の最大化を図ろうとする家族戦略がみられ、そこでは父親―息子ラインが収入の中核的役割を担うことになる。しかし子供たち、とくに息子は父親の職業を単に継承するだけでなく、職業の多様性や職業の上昇移動（たとえば半熟練労働者）の方向性も序々に認められるのである。

それに対してイングランド・ウェールズのホスト国家族では一方で家業として農業がみられ、そこに世帯主を中心として、それ以外の家族員が副次的役割も持つという家族戦略がみられる方向と、他方では世帯主が雇用労働の形態で稼ぎ手の中核を担う役割をもち、家族員がそれをサポートするという家族戦略の両局面が見られたのである。

以上から筆者は1880年代の家族に関して次のような結論をえることができるのではないかと考える。つまりイギリスのように農業よりも雇用労働労働市場が発展している場合には、雇用労働中心の家族は単純家族世帯に適合しやすく、両親と子供を中核とした家族形態で、それ以外の親族を排除する傾向にあるのに対して、アイルランド人のような移民家族の場合には雇用労働が中心である家族を形成させることにより、単純家族世帯に適合する家族形態をとるといふ家族戦略を選択したと考えることができるのではないだろうか。しかし、アイルランド人移民の家族は子供数に関する伝統的価値観を残存させた家族編成をすることがそこに認められるのである。したがってそこには移民が受け入れ国に融合しながらも出身国での家族的アイデンティティを維持させながら家族編成をさせているものと判断されるのである。

以上においてイギリスを NAPP データや Essex データを利用することにより、アイルランド人移民とネイティブな家族構造を数量的に検討してきたのであるが、それらの分析結果

をイギリスの歴史的コンテキストにおいて充分解釈してきたとはいいがたいのである。したがってそれらの問題は今後の課題としておきたい。さらにイギリスにおいてはアイルランド人移民が多いロンドン、リヴァプール、グラスゴーの詳細な比較研究が検討課題として残されている。

〔付記〕本研究を遂行するにあたって、ダブリン大学トリニティ・カレッジ、Louis Cullen 名誉教授、ミネソタ大学人口センター、Steven Ruggles 教授、Evan Roberts 研究員、Catherin Fitch 研究員、エセックス大学、Kevin Schürer 教授、Matthew Woollard 博士に深く感謝しておきたい。なお本稿は2005年度桃山学院大学特定個人研究費助成による「欧米社会における家族構造の比較的研究」の成果報告である。

参 考 文 献

1. 英国議会資料

First Report from His Majesty's Commissioners for Inquiring into the Condition of the Poor Classes in Ireland with Appendix (A) and Supplement, B. P. P, H. C. 1835,

Emigration Statistics of Ireland, 1881, B. P. P Emigration 26, Irish University Press 1971.

2. データベース

NAPP, GB 1881 Data File, Minnesota Population Center, University of Minnesota 1881

Census for England and Wales, the Channel Island and the Isle of Man (Enhanced Version), UK data Archive SN 4177, University of Essex

3. 一般書

Anderson, Michael, *Family Structure in Nineteenth Century Lancashire*, Cambridge University Press, 1971.

Armstrong, Alan, *Stability and Change in an English County Town*, Cambridge University Press, 1974.

Baines, Dudley, *Migration in a Mature Economy*, Cambridge University Press, 1985.

Bovenkerk, Frank, On the Causes of Irish Emigration, *Sociologia Ruralis*, 1973, 13-4, 263-275.

Carney, F. J., Aspects of Pre-Famine Irish Households Size; Composition and Differentials, L. M. Cullen & T. C. Smout (eds.) *Comparative Aspects of Scottish and Irish Economic and Social History*, John Donald Publishers, 1977, 32-46.

Carney, F. J., Household Size and Structure in Two Areas of Ireland, 1821 and 1911, in Cullen, L. M., & Furet, F., (eds.) *Towards a Comparative Study of Rural History, Ireland and France 17th-20th Centuries*, Proceedings of the First Franco-Irish Symposium on Social and Economic History, 1980, 149-165.

David, Cheal, The One and the Many: Modernity and Postmodernity, in Graham Allan (ed.), *The Sociology of the Family*, Blackwell, 1999, 68.

Collins Brenda, The Irish in Britain, 1780-1921, B. J. Graham & L. J. Proudfoot, *An Historical Geography of Ireland*, Academic Press, 1993, 366-398.

Cousens, S. H., Emigration and Demographic Change, *Economic History Review*, Vol. 14, 1961, 275-288.

Cousens, S. H., The Regional Variations in Population Changes in Ireland, *Economic History Review*, Vol. 17, 1964, 301-321.

Cullen, L. M., *An Economic History of Ireland Since 1660*, B. T. Batsford Ltd 1987 (Second Edition)

Devine, T. M. (ed.), *Irish Immigrants and Scottish Society in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, John Donald Publishers, 1991

Eire, *Commission on Emigration and Other Population Problems, 1949-1954 Reports*, The Stationary Office, 1954.

- Fielding Steven, *Class and Ethnicity, Irish Catholics in England, 1880-1939*, Open University Press, 1993.
- Finnegan Frances, *Poverty and Prejudice, A Study of Irish Immigrants in York 1840-1875*, Cork University Press, 1982.
- Fitzpatrick, D., *Irish Emigration 1801-1921*, Dundalgan Press, 1985 (Reprinted)
- Fitzpatrick, D., Emigration, 1801-70, W.E. Vaughan (ed.) *A New History of Ireland V, Ireland under the Union, 1 · 1801-70*, Oxford University Press, 1989, 562-622.
- Guinnane, Timothy, Carolyn M. Moehling and Cormac Ó Gráda, *The Fertility of the Irish in America in 1910*, Center Discussion Paper, No.848, Yale University, 2002.
- Haslett, John and W.J. Lowe, Household Structure and Overcrowding among the Lancashire Irish, *Histoire Sociale-Social History*, No. 19, 1977, 45-58.
- Hatton, Timothy J. and Jeffrey G. Williamson, After the Famine: Emigration from Ireland, 1850-1913, *The Journal of Economic History*, 53-3, 1993, 575-600.
- Higgs Edward, A Clearer Sense of the Census, *The Victorian Censuses and Historical Research*, HMSO, 1996.
- Higgs Edward, *Making Sense of the Census*, Institute of Historical Research, 2005.
- Jacson, John Archer, *The Irish in Britain*, Routledge and Kegan Paul, 1963.
- Kenny Kevin, Diaspora and Comparison: The Global Irish as a Case Study, *The Journal of American History*, 2003, 90, 134-162.
- Lees, Lynn Hollen, Mid Victorian Migration and the Irish Family Economy, *Victorian Studies*, 1976, 25-43.
- Lees, Lynn Hollen, *Exiles of Erin*, Cornell University Press, 1979.
- Lowe, W. J., *The Irish in Mid-Victorian Lancashire*, Peter Lang, 1989.
- MacReild Donald M., *Culture, Conflict and Migration*, Liverpool University Press, 1985.
- MacReild Donald M., *Irish Migrants in Modern Britain, 1750-1922*, St. Martin's Press, 1998.
- Meenan, James, *The Irish Economy Since 1922*, Liverpool University Press, 1970.
- Minnesota Population Center, *Integrated Public Use Microdata Series, IPUMS-2000, Vol. 1: User's Guide*,
- Nugent, Walter, *Crossings, The Great Transatlantic Migratuins, 1870-1914*, Indiana University Press, 1995.
- O'Sullivan, Bruce, *The Irish World Widem Vol 1-6*, Leicester University Press, 1992-2000.
- Redford, Arthur, *Labour Migration in England 1800-1850*, Manchester University Press, 1964.
- Schürer, Kevin and Matthew Woollard, *National Sample from the 1881 Census of Great Britain 5% random Sample, Working Documentation Version 1. 1*, University of Essex, Historical Censuses and Social Surveys Research Group, 2002.
- Smyth, William J., Irish Emigration, 1700-1920, P. C. Emmer and M. Morner (eds.), *European Expansion and Migration*, Berg, 1992, 49-78.
- Swift, Roger and Sherdian, Gilley (eds.), *The Irish in Britain, 1815-1939*, Pinter Publishers, 1989.
- Wall, Richard, The Household: Demographic and Economic Change in England, R. Wall (ed.), *Family Forms in Historic Europe*, Cambridge University Press, 1983. 「世帯——その人口学および経済的变化, 1650～1970年」(中村伸子訳), 斎藤修編著『家族と人口の歴史社会学』, リプロポート, 1988, 265-292.
- アンダーソン, マイケル, 『家族の構造・機能・感情』(北本正章訳), 海鳴社, 1988.
- エンゲルス, 『イギリスにおける労働者階級の状態』(一條和生・杉山忠平訳), 岩波文庫, 1990.
- 斎藤英里, 「19世紀のアイルランドにおける貧困と移民」, 『三田学会雑誌』, 78-3, 1985, 82-92.
- 斎藤英里, 「アイルランド人季節移民と19世紀のイギリス農業」, 『三田学会雑誌』, 82巻特別号-Ⅱ, 1990.
- 斎藤英里, 「19世紀イギリスにおけるアイルランド人移民の特質」, 森廣正編『国際労働力のグローバル化』, 法政大学出版局, 2000, 15-43.
- 清水由文, 「20世紀初頭におけるアイルランドの農民家族—ドニゴールとテッペラリーの比較史—」,

- 『桃山学院大学社会学論集』, 36-1, 2002, 1-50.
- 清水由文, 「人口センサスによる新しい家族史研究」, 『桃山学院大学総合研究所紀要』, 31-1, 2005, 1-20.
- 富岡次郎, 『現代イギリスの移民労働者』, 明石書店, 1988.
- 本多三郎, 「19世紀中葉イギリスにおけるアイルランド人貧民」, 堀越智他『アイルランドナショナリズムの歴史的研究』, 論創社, 1981, 37-68.
- E. A. ハメル, P. ラスレット, 「世帯構造とは何か」(落合恵美子訳), 速水融編『歴史人口学と家族史』, 藤原書店, 2003, 303-348.

A Study of the Family Structure of Irish Immigrants in England and Wales at the late 19th Century

Yoshifumi SHIMIZU

The aim of this study is understood of the Irish immigrants in England and Wales at the 19th century from the perspective of comparing the family system of the Irish immigrants and the native England and Wales from a viewpoint of the theory of push and pull factors and the family strategy.

I have a hypothesis that in Ireland the type of simple family households with the partible inheritance system was dominated in the early 19th century, but after the Great Famine the type changed to extended family households and multiple family households with establishing the system of matchmaking and dowry and the impartible inheritance system.

The Irish population decreased 3 millions persons between 1841 and 1881 and the lots of poor population moved to America, Great Britain, Canada and Australia as the immigrants and they had same occupations in Ireland at their settled community. I think their movement meant the push factors and was related the change of family system after the famine.

The Irish immigrants formed the simple family households for adapting the community of the natives England and Wales and the head of household and their family members had the job for the well-being from the point of family strategy.

I use the data of England and Wales Census Schedule for testing of my hypothesis has NAPP (North Atlantic Population Project) data at Minnesota Population Center and AHDS History of University of Essex.

At the result of above analyzing I had the following conclusions.

1) I found distribution of the Irish immigrants concentrated on North-West England (40.1%), London (14.5%), Northern England (11.7%) and Yorkshire (10.4%), especially County Lancashire (38.5%) and Middlesex (10.9%).

2) On the average of size of household, the Irish immigrants (4.93 persons) are more members than the natives of England and Wales (4.2 persons), but the size of the Irish immigrants are smaller than the native Ireland (4.8), because the Irish immigrants took the birth control in England and Wales.

3) As the family structure of Irish immigrants, the type of the simple family households (73.8%) was dominated in the late 19th century as well as the same of England and Wales (72.4%). However when we compared the type of family by using the detailed tabulation of composition of kin group per 100 households, we could find a difference in the two types between the Irish immigrants (16.2 persons) and the natives (27.3 persons). The family of the Irish

immigrants had not only more slim, but also larger than the type of the natives of England and Wales, because the limitation of extension of kinship, particularly the small number of descendant generations, influenced the total number of kinships, though the Irish immigrants had more children than the natives.

However we can find the households of the Irish immigrants included many borders and lodgers in their household, because the Irish immigrants had the strong relations of community spirit. We can understand its Irish family characteristics expressed the Irish identity. Including borders and lodgers was also one of the family strategy in the family of Irish immigrants.

4) The household heads of the Irish immigrants had mainly non-skilled and unskilled workers and the ratio of their workers were approximately over the half the numbers, as the most number of occupations are General Laborer (14.4%) and on the next Iron Manufacture (4.0%) and Coal Miner (3.0%). The household members, especially sons almost inherited their father's job, but they had the various kinds of jobs little by little. Consequently we had very interesting result that the line of the household head and sons had the instrumental role of the family income and the line of the spouse and daughters played the supporting role in the Irish immigrant family.

Lastly I could test my hypothesis up to a certain point from the data, but I must interpret the result from the historical context of Ireland and England and Wales.